
十七歳の地図

あいぽ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十七歳の地図

【Zコード】

N8051D

【作者名】

あいぽ

【あらすじ】

高校三年生の十七歳の春、三人は出逢った。世の中のことなんか、これっぽちもも分からなかつた。だけど、この友情だけは永遠だと信じていた。三人の少年たちの友情を描く青春群像！！ 新章

『ScrapA11e』始まりました

第〇話（前書き）

この作品は、春の競作祭「はじめての×××。」への参加作品です。

三人の少年たちの、はじめての友情や恋を、どうか最後まで暖かく見守って下さりますよ、宜しくお願ひ致します。

あいぽ

第0話

なあ知つてるかい?
俺たちの背中には
翼があるんだ

空高く大きく飛べる翼さ

だけど

いつしか人はみんな
その翼を広げる事すら
出来なくなるんだ

そしてやがて

そんな翼があつた事さえ
忘れちまうんだ

それはまるで

ちつぽけな金にしがみついて
愛や夢さえも

忘れちまつたようにね

十七歳の地図

- seventeen - map -

作 あいぼ

第1話 はじまつせん歌えない（1）

＜1＞

『美味しい！ 安全！ 明日も食べたい！』

軽快なBGMをバックに、ハンバーグを口にしながら、顔をくしゃくしゃにして笑う幸せそうな子供たちの映像が、渋谷駅のホームにある、小さな蕎麦屋に掛けられた液晶テレビから流れていた。

「大きくなれよ～」

テレビから皿を反らし、黙々と蕎麦を食べている赤木英一の横では、そのハンバーグのCMを眺めていた山下順平が、それを真似しながら、おじけて英一の頭をなでていた。

「ばーか。順平、お前も早く食えよ」

英一は、つざわづに順平の手を払つと、食べ終わつた蕎麦のざんぶつを両手で抱えて、最後の一滴まで汁を飲んだ。

渋谷駅の構内にある小さな立ち食いの蕎麦屋には、周りにそびえるビルの合間から、暖かい春の口差しが煌めくように差し込んでいた。

「しつかし、英一。お前んとこの父ちゃんの会社すげえよな。このCM、最近毎日観てるぜ。『丸田食品』、子供たちの明日を守ります！』ってか、今や食の一流ブランドだぜ」

「何言つてんだよ」

「オレはなあ、お前がホント羨ましんだよ。一流企業で役員やつて
る父ちゃんを持つお前がよお」

順平は、蕎麦を食べていた手を休め、大きくため息をついた。

「今まで学校でバカばつからやつてきた俺らだけど、お前は、オレと
違い、確実に将来を約束されていん……」

「何がだよお？」

「だつて、いつかは入社できるんだろ、丸日食品に。あ～あ、丸日
なんかに就職できたら、一生安泰なんだらうな」

英一は、自分の横で田を細める順平の胸元を、拳でぽんと叩く。

「ばか。一流企業に入つたからつて幸せなもんか！ 俺らヤダね。
親父みたいな人生を歩くのは。仕事仕事で家にも帰つて来ねえアイ
ツのせいで、死んだ母さんはどんなに苦しい思いしてたか……。例
え社会から見たら成功者だとしても、俺は誰かを傷つけてまで、成
功なんかしたくはねえよつと」

英一は、食べ終わつた蕎麦のどんぶりをカウンターの上にあげ、
「『ハヤシライス』と小さなキッチンにいる老婆に渡した。

「一人の女さえ、幸せにできねえ男なんてサイテーぞ」

英一は、そう呟くとブレザーのポケットからタバコを取り出して、
口にくわえ火を点けようとする。

「な、知つた風な事言つてんのよ、」のバカ男。駅の構内は禁煙。そして、あんたは未成年」

くわえていたタバコをいきなり後ろから取り上げられた英一は、驚き振り返ると、そこには、英一らと同じ学校の制服を着た女の子が、両手を腰に当て、立正立ちをして立る姿があった。

「里美ちゃん……」

その女の子に気づいた順平は、少し顔を赤くして驚く。

「なんだよテメー。返せよ、里美」

一方、英一は、里美の華奢な腕を掴みタバコを取り返そうとする。

「やあ、ヤメテよ。ヒツチ！」

里美は英一をからかうように、嬉しそうに後ろへ跳ねる。

「英一……女の子を幸せにしたいんなら、ちゃんと、自分の進路を決めてからだね。将来が不安定な男についてゆく女の子なんていませんよーだー！」

里美は、英一に顔を近づけ舌を出し、無邪気に笑う。

「あんた学期末に、進路希望、提出してなかつたんだって？ 先生心配してたわよ。偉そうな事言つ前に、もっと自分の将来ちゃんと考えたらあ」

そして里美は、人差し指で英一の鼻をはじき、からかいつゝ言
い放つた。

「うっせーこのバス！ 犯すぞこのヤロー！」

里美にからかわれ、少しむつとした英一は、里美のスカートをめ
くり上げ、里美を抱き寄せよつとする。

「さやあ！ 何すんのよ、童貞のくせに！」

しかし、英一は、里美にその言葉に、思わず動けなくなってしま
つた。

「…………ったく、英一に順平！ ！ こつまでこんなとこで、香氣に
蕎麦食つてんのよ。もう始業式始まる時間なんだから、さつさと学
校に行きなさいよね！…！」

まるで勝ち誇つたかのような表情を浮かべる里美は、一人にそ
う言い放つと、駅のホームを向こうの改札口へと、元気よく走つてい
つた。

「ちくしょー！ 覚えとけよ、里美～っ！」

新しい季節のはじまりの朝、ホームを行き交う沢山の人だからに
まじり、両手を振り上げて、悔しそうに叫ぶ英一の前を、暖かな春
の風がそっと通り抜けた。

蕎麦屋を出た英一と順平は、渋谷駅のホームを、高校があるハチ公口へと歩いていたが、里美にからかわれ怒りがおさまらない英一は、終始イライラしていた。

「いや～。英一さあ、オレはねえ、ホントにつづくお前が羨ましいと思つよ」

しかし、そんな英一を横田に、順平はまたため息をついていた。

「なんなんだよ、お前はよおー。新学期そつそつとつきからため息ばつかつきやがつて」

英一は、順平のふくらはぎに、ふざけて小さく蹴りを入れる。

「だつてよお、前から思つてたけど、里美ちゃん、絶対お前の事好きだぜ」

「……ああーーー？」

英一は、立ち止まり、自分より背の高い順平を見上げる。

「あんな口づるせやつに好かれても嬉しくともなんともねえよつ！ 俺は、「お……、もつと大人っぽい女が好きなんだ！！」

「何が口づるせいんだよ！ 試験前は、いつもオレらにノート見せてくれたり、さつさだつて、お前の事心配してくれたり……、優しい子じやねえか」

順平は、まるで英一を諭すかのように語りだす。しかし英一は、

そんな順平の話を、まるで聞く耳も持たないかのようにな掃する。

「……興味ないね」

「ホントか……？」

「……ああホントだ」

ホームを行き交う人々から見れば、くだらない事を話しているかのように見えるが、二人は、人混みの中で、真剣に互いを見つめ合い話していた。

そして、英二の気持ちが分かつた順平は、ほっと安心したような笑顔をもらし、英二と互いの拳をぽんと叩き合つた。すると、なんだか可笑しくなつた二人は、見つめ合つたまま、はにかんだように微笑んだ。

「あ～あつ！ もう高校生活も最後だつてのによお、なんか面白れえ事ねえかなあーー！」

英二は、のけぞるように、後ろに大きく大きく背を伸ばした時だつた。

英二の視界に、自分たちと同じ制服を着た男子生徒が、何やらもめている様子が映つた。

「おい、順平。アイツ……去年まで、俺らと一緒にクラスだつたやツじやねえか

「……ん!? おおつ、アイツは優等生のメガネくんじやねえか」

「……だら

「ああ……」

英一と順平は、田を合わせ、にやつと微笑んだ。

「面白れえ事見つけたあ……！」

△△△

「……で、君の名前は？ それから住所と電話番号も教えなさい。あつ、一応本人確認するから学生証も見せるんだよ」

駅のホームの片隅では、ホームに差し込む朝の田差しが眩しいのか、一人の駅員が少し田をかすめながら、英一らと同じ制服を着た生徒に対して、少し偉そつた口調で何やら問いつめていた。

「ほ、僕は……」

そして、その生徒は、自分に詰め寄る駅員に対して、鞄を両手で握りしめたまま、先程からずっとおどおどしていた。

「君ねえ、さつきから黙つてばかりじゃ困るんだよ。朝のラッシュで、僕も忙しいんだからね。さつさつと学生証見せなさい！ なんなら、今から警察呼ぶよ」

「けつ……、警察うー！？」

その生徒は、『警察』といつ言葉に、ピクンと身体を反応させ、

額から流れる汗を必死にぬぐつた。

「だつて、君は、車内で、この子のお尻触つてたんだろ！ それは、『痴漢』と言つて犯罪なの…………！」

呆れたような口調で生徒に話す駅員は、どこか投げやりで面倒くわざうな感じだった。

そして、その横では、痴漢をされたと訴えていた20代前半くらいの女性が、冷ややかな眼差しで、その生徒を見つめていた。

「あ……、触つてなんかいません！」

しかし、その生徒は、精一杯の勇気を振り絞り、駅員と女性に自分の無実を訴える。

「駅員さん、……彼、そうは言つけど、駅員さんも見たでしょ。私がその子を捕まえた時、確かに彼の股間は膨らんでたわよね。」

「い、い、股間……！？」

こくらうつう状況であつたとしても、まだ若いキレイな顔立ちの女性から出たその言葉に、中年の駅員は思わず反応してしまつ。

「あ。あき君は何かい！？ 朝からこんなキレイなお嬢さんのお尻をなでまわした挙句、アソコを、ほ……ほほ勃起させてたのかつ！

！」

少し興奮気味に話す駅員は、その生徒ではなく、横にいる女性のお尻をなでまわすよつて見つめながら話していた。

「ち、違う。電車だ！ 電車が揺れたせいで、その人とぶつかったんだ！ 触つてなんかいない！」

生徒は、目には涙をため、泣きそうになりながら女性に訴える。

「じゃあ何かい！ 君は、」「……、このお嬢さんとぶつかっただけで、勃起したって言うのか！？ 一体どんな風に、このお嬢さんのどこにぶつかったんだ！？」

さつきの若い女性からの言葉で、駅員は性的な興奮を覚えたのか、その生徒に注意する事なんかすっかり忘れ、横にいるスラリストスタイルの良いその女性の身体をを上から下まで見つめて、勃起の原因を必死に追求しようとしていた。すると、そんな時だつた。

「さつきからエロいんだよ！ おっさん」

「彼……、触つてないって言つてんじやん」

誰かに肩を思いつきり引つ張られた興奮状態の駅員が、後ろを振り返ると、そこには、鋭い眼差しで自分を睨みつける英一と、隣にいる女性に、優しい笑顔を向ける順平がいた。

「な……、ななん何だお前たちはあ！？ けけ警察呼ぶぞ！」

！」

英一に睨まれた駅員は、ますますヒステリックに声を張り上げる。一方で、痴漢の疑いをかけられていた生徒は、突然現れた二人にただ呆然と目を丸くしていた。

「あなた達には、関係ない話なの……。邪魔しないで」

しかし、女性の方は、少しため息をもらしながらも、あくまでも冷静に、英一と順平に話をする。すると、さつきまで駅員を睨みつけていた英一は、目線をその女性に移し、少しばにかんだように彼女に微笑んだ。

「関係ねえだと……。んな事ね～よ。だつてコイツは……」

「俺たちの『トモダチ』だからよつ……」

そして、英一と順平の二人は口を揃え、堂々とその女性と駅員に言い放つたのだ。

その言葉に、一瞬、その場が静まりかえり少しの沈黙ができた。英一と順平を覗いて、もともと居合わせた三人は、英一らの言葉に唖然としてしまったのだ。すると、さつきまで痴漢の疑いをかけられていた生徒は、この場から逃げられるチャンスだと思ったのか、なんとその隙に、いきなり改札口の方へと思いつきり走り出した。

「あつ、ちょ……オイ待て！　」の勃起男……」

「……つーか、オレらも始業式始まつちまうんで行くぞ、英一……」

突然の逃走に驚いた英一と順平だったが、時計を見ると、始業式まであと数分だつたため、逃げ出した生徒の後を追い、二人も勢いよく走り出した。

「トモダチかあ……」

一方、痴漢の疑いをかけていた女性は、英一らのその言葉に、思わず過去の自分の甘酸っぱい記憶でも辿ってしまったのか、優しい微笑みを浮かべながら、走り出す英一らを見つめた。そして、春の空をそっと見上げて、大きく深呼吸した後、駅員に軽く会釈すると、ベージュのトレントーンチコートの襟を立て、まるで何事もなかつたかのよつに、英一らと反対方向にさつそつと歩いていった。

「あれつ、ちよつ……、お嬢さん。ままだ話かああ。その時、あの痴漢は、どんな風にあなたにぶつかつたんですか？」

「……いや、それよりきき君たちだ！ 待つんだ！ 止まれ！ 止まらないかー！」

そして、最後に一人取り残された駅員は、逃げ出す英一らを、ホームの人混みを必死に掻き分け追いかけた。

しかし、英一は、ヒステリックに追いかけてくる駅員に向かい、振り返ると、精一杯の大きな声を張り上げた。

「待てつても、止まつてなんかいられつかよ！ 僕たちは、ただ……走り続ける事しかできねえんだからさあつー！」

春の日差しを身体いっぱいに浴び、まるで背中に大きな翼を広げたかのように、拳を突き上げ思いつきり空高くジャンプした英一の声は、渋谷駅のホームを爽やかに駆け抜けた。

「これから世の中で……
一体どんな風に

生きてゆけばいいのかなんか

あの頃の俺には

よく分かんなかった

だけどさあ

手を伸ばせば

何か大切なもんが見つかる気がして

ただいつも

突っ走つてたんだ

それが……

社会の中ではまだ

はじまりさえ歌えない

俺たちだった

第2話 はじまりさえ歌えない（2）

<1>

暖かな日差しが、行き交う人々を優しく包み込んでいる、ある春の日の朝、渋谷駅のホームの片隅にある蕎麦屋では、今朝も、英二と順平が、学校へ行く前に蕎麦を食べていた。

「ぬ……ん~いや、ベージュかな……ー? くう~ストライプも入つてる気がするしなあ」

カウンターに向かい必死に蕎麦を流し込む英二の横で、先程から両手にどんぶりを抱えた順平は、カウンターに持たれかかり、向かい側のホームを、ぼーっと眺めていた。

「お~い順平、お前、ナニ独りでブツブツ言いつてんだよ。ちゃんと見張つてんのか!?」

英二は、そう言つと、手にしていた割り箸を順平の顔に向ける。

「……っ~か、違うんだよ、英二。ほら、あれ見てみろよ。あっちのホームにしゃがんでる女の子ら、もう少しでパンツが見えそうなんだよ」

「ばーか。お前、パンツなんか見てねえで、ちゃんと見張つてくれよ」

眉間にシワを寄せながら、向かい側のホームをじっと見つめる順平に、英二は蕎麦を食べていた手を一回休め、少し口を尖らせる。

しかし、そんな英二に対し順平は、あくまでも向かいのホームから目線を動かさず、英二に話し始めた。

「ばかはお前だよ、英二。何考えてるか知らねえが、今朝でもう七田田だせ。こんなに人が多い渋谷だ。もう出逢えこねえって」

「分かってるさ……んな事。ただ、なんとなくだ。そう、なんとなく。もつかい出逢えたら、運命かななんて。だって、凄くねえ？ もし、また出逢えたとしたら、それこそこんなに人が多い渋谷で、一回も偶然出逢えた事になんだぜ……」

「……まあ、出逢えたらの話だがな」

真っ直ぐに向かいのホームを見つめたまま、「ホンとワザとらしく咳き込む順平を、英二は少し睨み付けた。

「……なんだよ…… 順平、なんか言いたい事あんなら、言えよ……！」

「……特に言いたい事はないが、ただ……」

「ただ……なんだよ……？」

せつときから、自分を理解してくれようとしない順平に対して、英二は苛つきを隠せず、思わず突つかかってしまう。しかし、そんな英二に対し、順平は冷静に問い合わせる。

「惚れたのか、英二？」

「……ああ惚れたさ。悪いいか？ 順平」

「英一、お前……、前々から言おうと思つていたが……」

「なんだよ？」

真剣な表情を見せる英一に対し、順平は、向かいのホームから目をそらし、やつと英一の目を見つめる。

「英一……、お前、ホントに果てしないほどバカだよな」

そして、英一にそつと言つた順平は、堪えていた笑いを、ついに耐えられなくなり、英一を指差しながら、大声で大爆笑しはじめた。眉毛をハの字に倒して笑い続ける順平のその目には、笑いすぎて涙が滲んでいた。

「ナニが惚れただよ！ 英一、お前、自分で言つてる事分かつてんの！？ 一回すれ違つた程度のどこの誰とも分かんねえ女に惚れるか、フツー！？ ははは……ははは……！」

ことの発端は、先日の始業式の日の朝の痴漢騒動だった。

あの後、英一は、痴漢されたと訴えていた二十歳くらいの女性が、どうしても気になると言ひはじめ、あの日以来、今日でもうかれこれ七日間ずっと、毎朝のようにここにこの蕎麦屋で順平と一緒に、その女性がもう一度通りかかるのを待つっていたのだ。そして、そんな馬鹿げた英一の行動に、呆れながらも付き合つていた順平は、英一が真剣な表情で「その女に惚れた」という言葉に、堪えていた笑いがついに抑えられなくなり、涙を流しながら大爆笑しはじめたのだ。

「順平…… お前には分かんねえんだよ、あのヒトの事が！ あのヒトは、そう……なんかこお～、寂しさ！？」 そう、寂しさだ！ あのヒトは、瞳の奥に、誰にも気づかれねえように寂しさをしまい込んでたんだ。そして、その寂しさに俺は気づいてしまったんだよ。だから、俺が……、俺があのヒトの寂しさを救つてやんねえといけねえんだ！ 絶対俺は、あのヒトを幸せにしてやるんだ」

「なにが、俺があのヒトを救つてやるだよ……。救つてやりてえのは、お前の頭ん中だぜ」

しかし、ため息をつく順平に対し、両手を握り締め、真っ直ぐに順平の目を見据えて話す英一の目は真剣そのものだった。そこで、順平は、そんな英一に、半ば呆れながらも右の拳を突き出す。

「わあ～つたよ！ 付き合つよ～ お前にみたいな、超がつきれない程の大馬鹿男に付き合えんのは、昔つからオレだけだもんな。ただし、お前、期限を決める。こつまでもダラダラと、そんな訳のわかんねえ女待つても、お前のタメにはならねえよ。いいか、今日でちよつと七日目だから、今日までだ。オレたちは、もう一週間待つたんだ。今日の夕方までに再会できなきゃ、お前も男だつたらきつぱりあきらめり！～」

さつきまでのおじけた表情とは違い、自分をまっすぐと見つめる順平に対して、英一は、少し考えた後うなずいた。

「……オッケー順平！ 約束だ。俺はきつと逢つてみせるぜ」

唇を少し斜めに上げ自信たっぷりに微笑む英一は、順平の目を見据え、順平から出された拳を、自分の拳でポンと叩いた。

そんな時だった。いきなり順平が興奮気味に大きな声を出して叫

び出した。

「ああああああ！ オイ英一！ いい！ 見るよ、見るよ、見るよ
！！」

「ああ～？」

英一は身を乗り出し、順平が指差す方を見ると、なんと順平がさつきまで見ていた向かいのホームでしゃがんでいた女の子たちの一人が、ちょっと動いたせいで角度が変わり、英一と順平からは、はつきりとパンツがまる見えになつたのだ。

「つあおおおおおー 黄色だぜー！ 喜べ、英一ー オレたちの未来はきっと、あの黄色いパンツのように明るいんだーー！」

順平は、ガツツポーズをして天を仰ぎ、抑え切れない感情を身体いっぱいで表現していた。

そして、そんな順平に対し、今度は英一が呆れながらため息をつく。

「……順平、お前、溜まりすぎなんじゃねえの？」

「バカヤロー！ 一回三回のオナニーはオレの口課だぜーーー！」

「何いー？ お前つ……、一回にそんなにしてんのかーー？」

驚く英一に対して、順平は腕を組み、自信に満ち溢れた表情で、ただ豪快に笑っていた。英一は、そんな順平を見て、ため息まじりに言つ。

「順平、お前……、ボクシングで頭殴られすぎて、頭ん中、白いおたまじやくしに侵されてんじゃね～か！？」

そして英一は、おじけて順平の頭にワンツーパンチをくりだした。すると、将来はプロボクサーを目指しているだけあって、順平はタンタンと足をリズミカルに動かし、英一のパンチを軽く避けて、二人のじやれあいが始まった。

「うひせ～、英一！　この時代遅れの純愛男がつ……」

「バカヤロウ、お前みてえなイカ臭い男に言われたかねえよ……！」

二人は、渋谷駅のホームの人混みも気にせず、ボクシングの真似事をしながら、時間も気にせず夢中になり、遊びはじめた。

「な～に、朝からまた馬鹿な事やつてんのよ、あんた達は……」

突然に、後ろから頭をはたかれた英一と順平が振り返ると、里美が無邪気な笑顔を浮かべ笑っていた。

「あ……、おはよう里美ちゃん。また一緒にクラスになつたね」

里美に気づいた順平は、英一とじやれあうのを止め、里美の方に身体を向け、真っ赤にした顔をつづむけながら挨拶をする。

「うん、そうだね。順平！！　また、この馬鹿男も一緒にどね……」

…

里美は、英一の方を向いて、嬉しそうにあつかんべーをする。

「うひせーよ里美！ 順平、ほらつ今夜のおかずだあ～！～！」

すると英一は、笑いながら、里美のスカートを思いつきりめぐり上げ、ホームを改札口へと走りだした。視界に、里美の真っ白なパンツが飛び込んできた順平は、声にならない声をあげ、思わずその場に固まってしまう。

「ちよつ、英一～ツ！ 待ちなさい～ あんたねえ～～～！」

「バーカ、里美、こない俺を馬鹿にした仕返しだあ～～！」

渋谷駅のホームには、今朝も英一たちの無邪気な声が響いていた。

恋つて一体なんなんだうつな……～？
世界中の人たちが

例えばハラを抱えて笑つたとしても
名も知らぬあのヒトへの恋は
俺の心中の真っ白の地図を
ゆづくり彩りはじめたんだ

第3話 存在（1）

< 1 >

「よい、はじめ！」

英一らが通う私立南青山学院高校の、特進クラスでは、大学受験に向け模擬試験が行われていた。

三十名ほどが集まる、緊張の貼りつめた静かな教室は、試験監督の教師の合図が響き渡つたと同時に、生徒たちが鉛筆を走らす無機質な音で一斉に包み込まれた。

午前八時から始まつたこの模擬試験は、すでに二科目のテストを終了し、午前中最後の科目の英語のテストを向かえていた。

そして、その教室の中には、先日の痴漢騒動で英一らから救われた男子生徒、^{ミズノタクミ}水野拓巳の姿もあつた。

東京都内の中でも、偏差値的には、中の上に位置する、南青山学院高校では、毎年僅かながらも、現役での東大合格者を輩出しており、三年生になると一クラスだけ設置される、この特進クラスの三十名の生徒たちは、『目指せ東大合格！』を合言葉に、受験戦争の中を必死に勝ち抜こうとしていたのである。

将来はプロボクサーを目指す順平や、卒業後の進路を決めてすらない英一とは違い、この特進クラスの生徒たちは、寝る暇も惜しむ程の勉強漬けの毎日だった。

必死に机に向かい、鉛筆を走らす生徒たちの中で、拓巳の様子に異変が起きたのは、試験開始から、四十分を過ぎたところだった。

ひとつひとつ調子よく問題を解いていた拓巳だったが、難問に差しかかった時、途中でふと机から顔を上げたのだ。

するとその時、拓巳の視界に、前を座る女子生徒の背中が映った。しかも、その女子生徒は、模試を受験する生徒たちの熱気で教室の中が暑かったのか、ブレザーを脱いでいたため、拓巳の視界には、彼女が背中を丸めて机に向かう度に、白いブラウスから、うつすらとブラジャーの線が見え隠れするのが飛び込んでくるのだ。

拓巳は、自分の前に座る女子生徒の、白いブラウスから浮かび上がる、淡い水色をしたブラジャーの色や立体的な形に、思わず釘づけになってしまった。

身体中の血が全身をドクドクと大きな音を立てて駆け巡っているかような感覚に支配された拓巳は、自分の意思とは関係なく、気がつけば、股間が大きく大きく膨らんでしまっていた。

そして、次第に顔中が熱を帯びたように火照ってきた拓巳は、たまらなくなり、誰にも気づかれないように、そつと右手をポケットに忍ばせ動かし始めた。

<2>

「あ～っ、順平、お前、そのカレーパン俺のだかんな、絶対え食うなよ！」

「ちょ…ッ、バカ英一！ ちゃんと順平と分けなきゃダメでしょ。

「……」

午前中の授業の終了のチャイムが鳴ったと同時に、英一、順平、里美の三人は、里美が買ってきた幾つかのパンと牛乳を抱え、屋上に向かう階段を駆け上っていた。

「そうだ、そうだ、バカ英一！　お前は、駅の蕎麦でも食つて、一生ストーカーでもしどけ！！」

順平は、真っ先に階段を駆け上がっていた英一を追い越し、英一の肩をポンと押す。すると、それを一番後ろで聞いていた里美は、弾むように一段飛ばしで階段を上がり、順平の横に並び、英一に作り笑顔を投げかける。

「へ～！　英一、あんた好きな人なんかいるんだ？」

里美は、両足を思いっきり広げ、腕を組んで仁王立ちで英一を見下ろした。

「里美ちゃん、好きな人とかってゆうレベルじゃないべ、コイツはただのストーカーなんだから！」

そして、そんな里美の横では、英一を指差しながら豪快に笑い出す順平がいた。

「な～んだ。つまんないの！」

「つっせーよ、お前ら」

順平の言葉を聞いて、ほつとしたように無邪気な笑顔を浮かべる

里美とは対象的に、英一は、独り取り残された踊り場で、ポケットに両手を突っ込み、少し斜に構えて順平と里美を見上げていた。

屋上の扉の窓から差し込む眩しい程の太陽の光は、三人をまつすと照らし、それぞれの影を長く映し出した。

「な～に寂しそうに眩やいてんだよ、英一。今日中には、また再会できる自信があんだり。早く上がつて来いよ」

少し寂しそうにする英一に気付いたのか、順平は、英一に優しく笑いかけ、屋上の扉に手をかけた。

◀ 3 ▶

校舎の屋上は、一歩足を踏み入れると、グランドを美しく彩る満開の桜の香りを、春の暖かな風が運び込み、優しい桜の香りで溢れていた。

「気持ちはいい！」

里美は、桜香る春の風に髪がさらわれないように、額に右手を添えながら、満面の笑みを浮かべ、屋上を見渡していた。

「ホントに……春の日の屋上って、気持ちがいいよなあ

「ああ、いつから、いつやつて空を眺めると、イヤな事なんてなんにも忘れちまうしちゃうぜ。」

気がつけば、英一たちは、三人横並びになり、春の爽やかな空に両手を伸ばし、大きく伸びをしていた。

すると、そんな時だった。何気なく、屋上のフェンスに目をやつた順平が、眉間にシワを寄せ英一に呟いた。

「……おい、英一。あそこに、誰か立つてねえか？」

「ああ～！？」

順平が指差す方向に、英一もゆっくり目線を合わせてゆくと、確かに屋上のフェンス近くに、何やら人影が動いているのが英一にも見えるのだ。

「……おい、あれ、フェンス乗り越えちゃってねえか……？」

英一は、順平に顔を寄せ呟く。

「ああ……、乗り越えちゃってるね、あのヒト」

順平は、英一の目を見つめた後、一人は恐る恐るフェンスの方へ近づいた。

すると、フェンスを乗り超えた向こう側で、何やら誰かがしゃがみ込んでいる姿が、一人の視界に入ってきた。思わず、息を飲んだ英一と順平は、顔を合わせ、驚きのあまり声を上げた。

「アイツは……、」ないだの勃起男！？」

なんと、屋上のフェンスの向こう側では、小さくしゃがみ込んだ

拓巳が、身体をぶるぶると震わせていたのだ。

第4話 存在（2）

<1>

「あいつは……、こないだの勃起男　！？」

英一と順平が、顔を見合わせ驚く声が、屋上に響く。

二人の視線の先には、屋上のフェンスを乗り越え、僅か六十センチくらいの足場にしゃがみ込み、小さな身体をぶるぶると震わす拓巳の姿があった。もしも、一步でも足を踏み出せば、まっさかさまに下に落ちてしまいそうな場所に拓巳はいたのだ。

「私、先生呼んでくる！…」

今にも屋上から落ちてしまいそうな拓巳の姿に気づいた里美は、悲鳴にも似た声を上げ、足早に屋上をあとにした。

「おい！ 勃起男、お前をこでナーやつてんだ！？」

「痴漢の次は、自殺かあ？ 危なねえから、早くこっちに戻つて来い」

一步一步拓巳に近づきながら投げかける言葉は、いつものようにおどけている英一と順平だが、今にも屋上から落ちてしまいそうな拓巳の姿に動搖を隠せない。二人の額は、じわりとイヤな汗で湿つてきていた。

さつきまでは心地よかつた春の風も、今は、まるで小さな拓巳の

身体を屋上から落とそうとしているようで、春の風が屋上を通り抜ける度に、英一と順平は心臓の止まる思いがした。

「来るな……僕に近づいたら飛び降りるぞ……」

瞬間、拓巳は立ち上がり、掘んでいたフェンスから手を離そうとする。

「ナニやつてんだ、お前え……」

英一は、拓巳を睨みつけるような眼差しで、拓巳がいるフェンスまで駆けてゆく。

「来るなと言つただろー。本当に飛び降りるぞ……」

しかし、その言葉とは裏腹に、狭い足場に立ち上がり怖くなつたのか、拓巳は、フェンスにしがみつきながら、目には大粒の涙をためて震えていた。

「ホントは、怖えんだろ？ 一体ナニがあつたんだよ？」

英一は、優しい表情を浮かべ、フェンス越しの拓巳に話しかける。

「…………」

しかし、拓巳はフェンスにしがみついて、小さな身体を震わすだけで、ずっと黙り込んでいた。

「あん時さあ、駅のホームで言つたじやん。オレたち同じ高校の『トモダチ』じゃねーか。なんか辛い事でもあつたんなら、聞いてや

るし、力になつてやるぜ」

順平も、英一の横に並び、フェンス越しの拓巳に言葉をかける。

屋上は、心地の良い暖かな春の日差しで溢れていたが、フェンスを挟んだ三人の周りだけは、ピンと張り詰めた冷たい空氣に包まれていた。

数分の沈黙のあと、口を開いたのは拓巳だった。

「……こないだ、駅のホームで助けてもらつた事は、礼を言つよ」

「ああ……」

「だけど、勘違いしないでくれ。僕は、君たちの事を「トモダチ」だなんかとは思つていないから。君たちと僕とでは、生きている世界が違うんだ。だから、僕が、今、たとえ苦しみ悩んでいてたとしても、君たちが、僕を理解しようがなんて、そんなおこがましい事は言わないのでくれ」

「……んだと、このヤローーー！」

自分たちを、まるで見下しているかのように話す拓巳の言葉に、短気な英一は、怒りを抑えられなくなり、拓巳がしがみついているフェンスを、力いっぱい蹴飛ばします。

拓巳の身体は、その勢いで大きく揺れ、足のつま先が、狭い足場からはみ出てしまい、下に落ちそうになつた。思わず大きな悲鳴を上げた拓巳は、フェンスを掴んでいた手に思いつきり力を入れた。

「おひつー、英一、お前、勃起男を殺す氣か？」

拓巳の言葉で、興奮した英一は、順平に身体を押さえつけられながらも、拓巳を睨みつけ大声を放つ。

「ナニが君たちと僕とでは住む世界が違うだと？　ああ！？　見下したように、言つてんじやねえぞ！　おんなじ十七歳の高校生だろうが！」

「……同じ高校生？　馬鹿な事言つなよ。僕の偏差値がいくらあるか君はしってるのかい？　君たちのよつた下等な人間と同じにしないでくれ」

「なんだと、コラア……」

「だいたい、おかしいんだ。世の中は――いつだってそう、僕のようく優秀な人間はいつも苦しまなきやいけない。君たちのように、何も考えず、ただ、だらだらと毎日を過ごしてゐる人間もいるといふのに、僕は……、僕は、ここで死ななきやいけないなんて不条理すぎる……」

フーンスを両手で握り締め、うつむき呟くように話す拓巳の顔からは、ぽたぽたと大粒の涙がこぼれていた。

「死ななきやいけない……？　ナニ言つてんだよ。死ななきやいけない人間なんている訳ねえだろ……」

拓巳のひとつひとつとの言葉の節々に、少し苛立ちも感じる英一だつたが、まるで世界中の悲しみを、その小さな身体に背負い込んでいるような拓巳の姿に、英一は胸がいっぱいになり、無性に何か拓巳の力になりたくなった。

「君たちには理解できないかもしれないが、僕は死ななきやいけないんだ。偏差値が……偏差値がどんどん落ちてゆく僕に、生きてゆく価値などないんだ！ 僕ら進学希望の受験生たちは、常に偏差値といつものさしだけで計られ生きてゆく。つまりは、偏差値を上げること意外に僕らの存在意義はないんだ。そこには、自分という人間性もなにもない。ただ、数字だけの世界なんだ。もちろん、今さら個性や夢などとか言つても、僕自身が偏差値でしか自分を表現することや、他人を評価することができないんだけどね……。僕らはみんな『はだかの王様』さ。偏差値という服を脱ぎ捨てれば、そこには何もないんだ。自分さえもね……。だから、だから偏差値という服を失つた僕は死ぬしかないんだ」

「ナニを馬鹿な事、言つてんだ。偏差値だけがすべてな事なんかあるもんか」

「最初に言つたろ？ 住む世界が違うんだ。僕が住む世界は、偏差値だけがすべてなんだ」

英一は、拓巳のその言葉を理解する」とも、反論する」ともできなかつた。

英一自身が、自分は何のために生きているのか、高校を卒業した後、一体何をしたいかさえも分からなかつたからだ。むしろ、自殺まで考えるほど、目標に向かってまっすぐに突き進もうとしている拓巳が羨ましくも思えた。

今の自分は、命をかけてまで何か熱中するものなどあるのだろうか？

英一の心の中には、いつも行き場のない虚無感が漂つっていた。

「……それに、僕は、病気なんだ」

「……！」

その言葉に、英一と順平は驚く。

「……イカないんだ。全く……」

「イカない……？」

英一と順平は、目を丸くして拓巳を見つめる。

「……つまりは、射精不全なんだ」

「射精不全　！？」

「ああ、勃起はするが、その……、いくらシテもイカない……」

「……？？？」

突然の拓巳の告白に、英一と順平は言葉を失ってしまった。

しかし、そんな二人をよそに、拓巳はまるで、今まで心の中に溜め込んでいたものを吐き出すかのように、二人に話しあじめた。

「一ヶ月ほどくらい前だったんだ。自分の部屋で東大の過去問を解いていた時にね、難問にさしかかり、どうしてもその……、オナニーをたくなつたんだ。だけどね……、その時僕はシテいたところを、母親に見つかってしまったんだ。それからなんだ……、何度シテも、何度シテもイキそうになると、必ずあの時の母親の悲しげで冷たい

表情が浮かんでしまい、急にしぶんでしまうんだ。そうなつてくると、もう僕の身体はどんどんおかしくなつてくる。僕の精巣に溜まつた精子たちは、きっと今の僕のように行き場を失つてしまつてゐるんだろうね。早く排出を望み、陽のある場所へ出たがつてはかのよひに、イカないのに、どんな些細な刺激でも、僕を勃起させてしまつよになつたんだ……！

「…………

「…………だから、僕はもう終わりなんだ。偏差値もさがり、身体も変な風になつてしまつた僕が、これからどう生きて行けばいいというんだ。…………でも、最後に、君たちに話を聞いてもらひたてすつきりしたよ。ありがと！」

拓巳は、話を終えると、涙に濡れてくしゃくしゃになつた顔を上げ、空を眺めた。

そして、何かを決意したかのよひに、少し頷くと、フーンスを掴んでいた両手を、そつと離そつとした。

「ちょっと待つたあ――！」

今まで、ずっと黙り込んでいた順平の声だった。

その声にびっくりした拓巳は、離そつとしていた両手で、またフーンスを力強く掴み、目を丸くして順平を見つめる。

「おいコラ！ 勃起男！ ナーが君たちに話を聞いてもらひたからすつきりしただ！？ すつきりしなきやいけねえのは、お前のボコチンだろ！――」

「な、ななんだよ、急に君は？」

「お前、セックスした事あんの？」

順平は、腰をかがめ少し上田で、拓巳に笑いかける。

「……なによ……」

「オレもないよ。だからさあ、お前、セックスもしねえで、死んでゆくなんてもつたいなくねえ？ セックスしに行こうぜ、オレらとよお。そうすりや、お前のイカないビヨウキつてのも、もしかしたら治るかもしねえぜ！ だつてよお、セックスつて、超気持ちいいらしいじやん。オレらの右手の何百倍も気持ちいいんだつてさあ！…」

順平は、驚き戸惑う拓巳の手を、フヨンス越しにがつしりと握り締め、豪快に笑い出した。

「いつだつてそ、うそ

よく考えりやあ

あの頃の俺たちに

出来る事つて言つたら

オナニーくらいいしかねえよ

だけどやあ

これからは

ぱあつと一緒に飛び立つんだ

独りでウジウジ考えんのはやめてれあ

みんなで一緒に探すんだ

俺たちが

これからを生きていくための意味を！！

第5話 愛の消えた街（1）

<1>

「えへつと……、名前はさくらちゃん、年齢は二十歳かあ。職業は事務……と。おい英一見てみろよ！　この女の子なかなか可愛いんじゃね～の！～」

順平、英一、拓巳の田の前には、華やかに並べられた、数枚の女の子のプロフィールカードが広がっていた。

名刺サイズのそのプロフィールカードには、それぞれの女の子の写真と、彼女たちの手書きによるプロフィール、そして様々なメッセージが綴られていた。

昼休みに、屋上から飛び降りようとしていた拓巳だったが、結局は、順平が言う『セックスする前に死ぬなんて馬鹿げている』とう、極めて煩惱的でくだらない説得で、自殺を思い止まつたのだ。確かに、まだ経験のない十七歳の三人の少年たちには、『セックス』という言葉は、きわめて甘美的で、自分たちの心の奥底にある探求心をくすぐる魔法のような言葉だった。

彼らの頭の中は、いつも『セックス』という未知なるものへの好奇心でいっぱいだった。

<2>

「……で、順平、この女の子たちとホントにヤレンのか！？」

英一は、タバコに火をつけた後、上を向いて、ふうっと大きく

息を吐いた。

「……つたりめーだろ！ 雑誌に女の子のセックストラベルが出てたんだよ。【私はここで『運命の人』と出逢いました……】ってな

順平は、腕を組み堂々と英一と拓巳に答えた。

三人は、学校が終わった後、一旦私服に着替えて、渋谷駅に集合した。そして、道玄坂の方へ向かい、ある雑居ビルに店を構えている【出逢いカフェ】に来ていたのだ。

三千円の入場料を払い店内に入ると、小綺麗に片付けられた店の中は、中央をパーテーションで仕切られて男性用の待合室と、女性用の待合室に分けられていた。

英一ら三人が案内された男性用の待合室の壁には、少し大きめなボードが掛けられており、そこには隣の部屋で待機している、数名の女の子たちのプロフィールカードが貼られていた。

英一らは、目の前に並べられた、出逢いを求める女の子たちのプロフィールや、パーテーションの磨りガラス越しに見える、女の子たちが動く様子に、好奇心を強く刺激され、先ほどから心臓の鼓動が早まるばかりであった。

「でもさあ、順平、ヤルんだつたら、別にこんなとこなんか来ず、ソープにでも行つた方が早かつたんじゃねえの？」

「馬鹿ヤロ。英一、お前、やっぱ『はじめて』はプロじゃイヤだろーー。オレは普通の女の子とセックスしたいんだ。それに……、ソープになんか行つたら一体いくらかかると思つてんだよ。学生の

オレらにそんな金ある訳ねえだろ。ここなら、入場料の三千円、そして女の子と話すためのトークチケット一千円で、計五千円しかかかんねえんだぞ！！」

「俺たちのセックス料は五千円かあ……。なんか金出してセックスするなんて、しつくりこねえけどな……」

英一は、興奮状態で話す順平を横田に、ため息をつきながらタバコを灰皿に押し当てた。

「バーカ。セックス料じゃねえよ。オレら今からエンジョとかする訳じゃねえんだからよ。この五千円は、オレらにセックスを教えてくれる『運命の人』との出逢いのお見合い料さつ」

「運命の人かあ……」

英一は、プロフィールが並べられたボードから田を離し、そつと店内の窓に目をやつた。

三階にあるその店の窓からは、渋谷の街を行き交う人混みが見えた。

「……ちくしょうー なあ、あんたは一体どこにいるつてんだよ……」

田を細め、渋谷を行き交う人混みを眺める英一は、この間の朝の痴漢騒動で出逢った女性の瞳に感じた、儂いほどの寂しさを想い出していた。

「英一、こないだの女の事考えてるのか？」

窓際に佇む英一に、順平がゆっくり近づいた。

「オレはさあ、昔からお前のダチだし、お前の恋ならいくらでも応援してやる。だけどな、どこに住んでるのかも、一体何者なのかも、名前すら分かんねえ相手を、どうやつてこの人混みで探すつてんだよ」

「…………」

「諦める、英一。あの女を探すのは今日までつて、オレと約束したじゃねえか。もう夕方だぜ。今日中に、もう一度あの女に出逢うなんて不可能だ。お前は、あの女を忘れるためにも、ここで新しい女を探して、新しい恋でもしろ!」

「……なんだそりや」

英一は、自分を見つめて真剣に話す順平のその言葉にくすっと笑い、ふざけて尖らせた口を順平に向ける。

「なんだよ、英一。ほら、ふざけてねえで、どの女の子を誘うのか早く決めるよ。……つてか勃起男、お前、なんでこんな所まで来て参考書なんか読んでんだ! 参考書じゃなく、プロフィール読めよ!」

順平は、先ほどから少し冷めた様子の英一と、緊張でガチガチの拓巳の首に、ボクシングで鍛えられた太い腕を回し、プロフィールの貼られたボードに、二人の顔を力強く近づけた。

「いたたたた。オイ、順平、お前え力入れすぎだつーの!」

「ちよつ、ななな何するんだよ、こきなり君はー。」

「「ひせー」の虚弱体質共！ 早く女の子選んで口説きこ行へぞー。」

狭い店内には、順平に首を締められ痛がる英一と拓巳の声と、順平の高らかな笑い声が、爽やかに響いた。

第6話 愛の消えた街（2）

＜1＞

「あなた……可愛いわね。ねえ、これから……何がしたい？」

少しでも動けば、二人の膝と膝が触れてしまうくらいの、狭く密着した部屋で、英一は隣に座る女性を見つめられていた。

グロスで艶やかに光を放つその女性の唇は、まだ女性を知らない英一を刺激した。ドキドキと高鳴る鼓動を抑えるのに精一杯な英一は、ただうつ向き、その女性と目を合わせる事もできずにいた。

先ほどの男性用の待合室で、なかなか女性を選ぼうとしない英一に対しても、無理矢理に、順平が英一に指名させたのが、この「さくら」という二十歳の女性だつた。

単に、この女性のプロフィールカードに、【エッチな友達募集】の記載があったからだ。

英一は、しぶしぶと男性用のプロフィールカードにペンを走らせ、受付で一千円のトークチケットを購入して、店内の奥にあるツーショットルームに案内された。

通常、男性は、この奥の部屋で、互いのプロフィールカードを交換して、店側に与えられた十分間という限られた時間をフル活用して、指名した女性をデートに連れ出そうと必死に口説く。

しかし、普段は順平と無鉄砲にバカ騒ぎしている英一も、身も知らずの初めて逢う女性と簡単に打ち解ける程、器用な男ではなかつ

た。

英一は「つづ向き、テーブルに置かれた互いのプロフィールカードをただ見つめる事しかできなかつた。

「緊張しているの……？ 本当に可愛いわね」

「…………ッ！？」

女性はくすつと笑つたかと思つと、隣に座る英一の膝に、すらりと伸びた指を伸ばし、小さく躊躇らせた。

そして……

「…………ねえ、いいわよ、あなたとなら。これから、いい事しに行こつか」

狭く密着した異様な空間で、吐息にも似たさわやかく「つづ」響く女性の声を、英一は耳元に感じた。

<2>

「おぱ……おぱ……おぱいが、おおお大きいですね……！」

英一の隣にあるツーショットルームでは、顔を真つ赤にした興奮状態の順平が、緊張のあまりいつもよりオクターブの高い声を上げて、女性に喋りかけていた。

順平が選んだ女性は、二十八歳の人妻だった。プロフィールカードに記載されていた、Fカップというバストの大きさが、順平の決め手だった。

『初めでは、やつぱ人妻のテクニックで昇天させともりこましょ
順平は、英一と拓巳に、鼻の下を伸ばしながら笑つて、この女性
を指名していた。

「……そつかなあ。私、やつぱそんなに胸大きい…？」

「ひや……ひやい！ おおお大きいです！」

「ねえ、君も、胸が大きい女の子は好き？」

隣に座る女性を見下ろせば、背の高い順平からは、彼女の胸の谷
間が非常によく見えた。

まるで大きな胸を強調するかのように、胸元が大きくあいたカツ
トソーからは、その女性のブラジャーに飾られた鮮やかなレースが
見え隠れして、それが順平をさらに興奮させていた。

幼い頃から、ずっと英一と一緒に遊んでいた順平だったが、乱暴
者のくせに、どこかが神経質でまっすぐなところを持つ英一とはまる
で違い、その性格は、おおらかで、いつも短気で^{かんじやく}痼癖^{かんじやく}を起こす英一
の面倒をよく見てきた。ある意味、英一よりも、何事に対しても順
応力はあつた。しかし、昔からスケベな男で、今まで彼女がいた事
もなかつたのに、セックスや女性の身体についてを、英一がうんざ
りする程、いつも順平は語つていた。

「君……、いい身体してるね。何かスポーツでもしてるの？」

「……おあつ…」

女性は、ボクシングで鍛えられた順平の胸元を、嬉しそうに指で撫ではじめた。

＜3＞

順平の隣の、拓巳がいるツーショットルームでは、ずっと沈黙が続いていた。

拓巳は、自分の隣で、本を開き静かに読書を始める女性を、ドキドキと緊張しながら、見つめる事しかできなかつた。

拓巳が選んだ女性は、

「幸子」という十八歳の学生だった。

カラーペンで可愛らしく彩られた他の女性たちのプロフィールカードとは違い、幸子のプロフィールカードは、纖細で綺麗な文字で作られていた。

まるで証明写真のように、まっすぐ正面を向いて正面に映つている写真と、【友達募集】とだけ、淡白に書かれているプロフィールカードを見た順平は、

「そんな女とヤれる訳ねえ」と、拓巳が指名するのを反対したが、今どきつまらない幸子の雰囲気に惹かれ、拓巳は指名した。

「……あつー？」

拓巳が、緊張で固まつた身体を少し動かした時、幸子のスカートから伸びる膝に、拓巳は自分の膝をぶつけてしまつた。

ぴたりと密着した膝からは、ズボンの上からでも、幸子の身体の温もりが伝わってきて、拓巳の股間は膨れあがつてしまつていた。

幸子にバレないように、拓巳は自分の鞄を、膨れ上がった股間に押しつけるが、それがさらに刺激となり、拓巳の顔は熱りはじめ、頭の中が真っ白になりはじめた。

「あなたも、セックスしたいんですねか？」

突然、幸子は読んでいた本を閉じ、拓巳に口を開いた。

拓巳を睨みつけるように見つめる幸子の目は、どこか冷たく、悲しそうな目をしていた。

「男の人って、女性をただセックスするためだけでしか見てないでしょ」

「……えつ？」

「お姉ちゃん、今日はいくら欲しいの？ そんなセリフはもう聞き飽きた」

「……え…きみ？」

「こないだ来た時なんかは、数枚の一万円札をテーブルに広げられてね、これでいいだろって、いきなり抱きしめてくる男性もいたわ」

「……君、ここに良く来てるの？」

思いもしなかつた会話の流れに、冷静に戻った拓巳は、幸子に問い合わせた。

「ええ、毎日来てる。家には帰りたくないから。母親がね、家でスナック経営してるの。あんな騒がしい場所で勉強なんかできないわ。

「

「…………」

「図書館は五時に閉まるでしょう。だから、その後は、いつもここに来て勉強してるの。ここなら十一時までいれるし、女の子はフリー ドリンクで、お菓子も自由に食べれるから、男の人と十分間話すだけ我慢すれば、私にとつて都合のいい、勉強部屋なの」

「……勉強！？ 君は、ここに勉強しに来てるの？」

「ええやつよ、だから私は、あなたとテーートする気も、ましてやい くらお金出されても、セックスする気なんかないから、それだけは 最初に言つとくわ」

幸子は、ため息まじりに拓巳に話した後、また本を開き読書を始めた。

いや、よくよく拓巳が見てみると、それは文庫本ではなく、参考書だった。

拓巳が、ようく耳を澄ませば、幸子は呪文のようないくつも英文の例を音 読した後、それを和訳をして、次のページでそれが正しいかどうかを確認していた。

一瞬、幸子が和訳につまり考え出した時だった。

「How come she changed her mind

？ それは、『何故彼女は考えを変えたか』だよ

「……え！？」

突然の拓巳の言葉に、幸子は驚き拓巳を見つめる。

「How comes? は『何故』って意味。確かに分かり難いよな。僕も、最初は戸惑つた。ねえ、大学受験するんでしょ。何処の大学受けるの?」

幸子は、今までここで出逢つた事がなかつたような、拓巳爽やか笑顔に、思わず笑顔がこぼれた。

そして、照れくさそうに、上田で拓巳に笑いかけた。

「……東大」

「僕と一緒に……」

窮屈で狭くるしい空間に、照れくさそうに笑いあつ一人の声が静かに響いた。

第7話 愛の消えた街（3）

<1>

「……ねえ、あなたとなら、私は全然平気よ」

「……えつー？」

さくらは、うつ向く英一の顔を、覗き込んで微笑みを浮かべた。

「私と、……したいんでしょ」

英一の膝の上を静かに踊っていた、すらりと伸びたさくらの指先は、英一の内腿に滑り込み、次第に上へと動いてゆく。

その指の動きで、英一は身体中の血液がドクドクと波打つのを感じ、得体の知れない感覚が、英一の身体中を駆け巡った。

そして、さくらの指が英一の股の近くまで上がってきた時、英一はさくらに小さく頷いた。

「嬉しい……。あなたとなら、素敵な夜を過ごせそうだわ」

「……ああ」

「ねえ、交通費のところ、どれにもチェックされてなかつたけど、どうする？ あなたなら一万円でいいわよ」

「…………」

交通費！？

英一は、自分が記入したプロフィールカードを見つめた。

すると確かに、『デートする際に、女の子にお渡しする交通費をチェックして下さい』と下の方に、三千円から様々な金額が書かれたチェック欄があつたのだ。

「力取んのか……？」

「やだ……そんな怖い顔しないでよ。ただの交通費よ、交通費」

急に顔を上げて鋭い眼差しで英一に見つめられたさくらは、英一をからかうように微笑む。

「お店の人間に聞かなかつたの？」ここでは普通、女の子とデートする時には、必ず三千円以上の交通費を渡す決まりになつてんのよ。まあ、私は例えお茶するだけでも、五千円以上の交通費をもらわなきやOKしないけどね」

さくらは、鞄からタバコを取り出すと、英一に笑いかけ、火を点けた。

「私、ここに常連の女の子の中では結構人気なのよ。だから、たつた一時間のお茶するだけのデートでも、五千円以上は頂だく事にしているの」

上を向き、ふうっとタバコの煙を吐き出すさくらは、どこか男を小馬鹿にし、見下しているようで、英一は次第に怒りを覚え始めた。

「ねえ、どうする？ 行こうよー。私が、大人の関係を結ぶ時は、絶対五万円以上の交通費は貰うんだから。だけど、あなたとなら一

万円でいいって言つてんだよ

「……………」

「……それとも、もしかして、私があなたの事を気に入つたとでも思つて、タダでセックスができるとか期待してた?」

とても可愛らしげに、どこか心がなく作られたような笑顔を浮かべ話し続けるさくらに、英一は馬鹿にそれでいるよつな気になり、拳を力いっぱい握りしめはじめた。

「あんたに払うカネなんてねえよ…………」

英一は、力いっぱい握りしめた拳を震わせながら、小さく呟いた。

「ははは……。残念ね、あなたの顔、結構タイプだし、まだ若いし、あんまお金持つてないだろうと思つたから、超サービスしたつもりなのになあ」

さくらは、皿を細め、英一の頬に手を添えた。

「俺に触んじやねえ!」

ついに怒りが爆発した英一は、店内に響き渡るよつに、声を荒だつた。

「ナニ熱くなつてんのよ……。馬鹿みたい。男も女も、しょせんお金じゃん。私たちは、お金が欲しい。そして男たちは、私たちとお茶をしたり、セックスしたいから、交通費という名のお金をちりつ

かせ、女を口説く。しかし女は、自分との出逢いを出来るだけ高く売るつとする。出逢いなんて、結局はゲームなのよ。そこには、誰もが真剣に愛を求める姿なんてないわ。男にも……女にもね。あるのは男と女のただの駆け引きと そしてお金だけ……」

「……あんただけだる。そんな事考へんのはー。」

「ははは、あなたつてホントに、子供なのね。それとも、男のくせに、恋に恋する乙女つてとかなー?」

「なんだと ー。」

英一は、握りしめた拳で、田の前のテーブルを思いつきり叩いた。店内中に響く英一の興奮した大きな声と、テーブルが叩かれた大きな音で、隣の部屋にいる順平や拓巳が心配そうに顔を出してきた。

「熱血坊やくん……。あなた、ここのお店に何人の女の子が登録してると思ってんの?一千人よ。一千人。つまり、この街のそれだの数の女の子が、男性との出逢いでお金を得ようとしてるつて事。分かつた! ? それとも、あなた、お金が全てじゃない、だなんてそん古ぼけたセリフでも言いたかった?」

さくらは、タバコを灰皿に押し当てた後、ヴィトンのバックを抱え、怒りに震える英一を残したまま部屋から出ていった。

「さよ……待てよーー。」

「あたし……お金のない男に興味なんてないから」

さくらといふ女へなのか……？

それとも、自分が直面した現実へなのか……？

向かうべき所すら分からぬ英一の怒りが、じりじりと英一の心を締め付けた。

＜2＞

「つおおおおおおおーー！」

順平と拓巳には何も告げないまま、怒りで店を飛び出した英一は、野獣の雄叫びにも似た声をあげ、雑居ビルの入り口にある出逢いカフェの看板に、握りしめた拳をぶつけた。

日が沈み暗くなつた渋谷の街には、英一の心を嘲笑うかのよう、色とりどりのネオンが輝きはじめていた。

そして、夜空からポソリポソリと降り出した雨は、次第に勢いをまし、容赦なく英一を打つけた。

髪をびしょびしょに濡らし、怒りに満ち溢れた表情で、肩ではあはあと息をしながら、英一は歩き続けた。

時折、渋谷の街を行き交う恋人たちが、英一とすれ違う度に、哀れむような眼差しで、英一を見つめ通り過ぎていった。

『男も女も、しょせんお金じゃん』

『それとも、あなた……お金が全てじゃない、だなんてそん古ぼけたセリフでも言いたかった』

英一の心に、先ほどさくらが浮かべていた、心のない作り笑顔

が何度も蘇つた。

「ちきしょお つ！」

足元にあつた居酒屋の看板を、思いつきり蹴り上げた英二の頬には、ずぶ濡れの髪からしたたる雨に混じり、涙が流れていた。

真剣に誰かを
愛したかつた……

そして真剣に誰かに
愛されたかつた……

いつでも俺の望みは
ただそれだけを

たけど

いつしかこの街は
出逢いを金で売る女たちと
女を金で口説く男たち
そんなヤツらにまみれた
愛が消えた街に
なつちまつちまつたのかもな
もしも

それが当たり前だと
言つんなら

そんな恋愛クソッタレだぜ

俺は……

俺は……

スクランブル交差点を渡り、ハチ公前に着いた英一は、まるで行き場を失った怒りを冷ますかのように、雨に濡れたアスファルトに大きく足を広げ座り込んだ。

見上げた夜空からは、シャワーを浴びているかのよう、英一の顔に勢いよく雨が降り注がれる。その雨は、英一の心を惑わす怒りや、瞳に溢れる涙を洗い流してくれるようだった。

どのくらい雨に打たれていだるうか。雨でぼやけた英一の視界に、真っ赤な傘がゆっくり近づいてくるのが映つた。

雨と涙に濡れた瞳のせいで、英一の視界に映る景色はぼやけているが、なぜかその赤だけは、はっきりと力強く英一の視界に映るのだ。

次第に、自分に近づいてくるその赤が、英一の視界から消えた時、英一は、自分を打ちつけていた雨を急に感じなくなつた。

「何してるの……？　こんなところで…？」

ふいに自分に話しかけてきた人影に、英一はゆっくりと目を向けた。

すると、そこには、始業式の朝以来、英一が一日惚れをして、ずっと探していた、あの女性が立つていた。

「あなたは……こないだの高校生でしょ」

驚く英一に、静かに笑顔を向けるその女性は、雨に打たれていた英一を、真っ赤な傘で優しく優しく包み込んでいた。

例えばこの街に

ホントに愛が

消えちまってたとしても

それはそれで

どうだつていいさ

だつて

それでも俺は……

きっと信じてるから

彼女が手にする

この傘のようこさあ

真つ赤に輝く愛の光を

第7話 愛の消えた街（3）（後書き）

はじめまして。
あいぽです。

「」まで読んで下せつた方、本当にありがとうございます。

ついに英一は、始業式の朝に一田惚れをした女性と再会を果たし、
次回より、物語は色々と動きはじめます！

皆様に楽しんで頂き、読んで良かつたつて言つてもうべるよつて、
頑張りますので、次回からも何卒コロシクお願いします。

あいぽ

第8話 teen age blue (1)

< 1 >

「あなたは……こないだの高校生でしょ」

英一は、自分に話しかける人影に、ゆっくりと目を向けた。すると、そこには、始業式の朝の痴漢騒動の時に、渋谷駅のホームで出逢った、二十歳くらいのあの女性が立っていた。

やっぱり、運命だったのか！？

英一は、自分の前に立っている、ずっと探し求めていた女性の顔を、雨でびしょびしょに濡れた顔で思わず見つめてしまう。

とても品良く化粧された、色白で整った顔立ち。

そこに美しく描かれた眉の形。

彼女が本来持つ大きな瞳を、さらに印象的に見せるように、ボリュームをつけたまつ毛。

肩の先で、ゆるく巻かれている、落ち着いたブラウン色した綺麗な髪。

少し胸元が開いた、黒のタイトなセータが引き立てる、すらりとした彼女のスタイルの良さ。

彼女を美しく包み込むかのように、肩にかけられたストール。

どれをとっても、今まで英一が学校の女子生徒たちには感じなかつた、大人の女性を感じさせる魅力だった。

彼女は、まるで英一を包み込むかのように、真っ赤な傘を英一に

向けて立っていた。

「風邪ひくわよ……」

英一にせつと眩やく彼女の眼差しは、とても静かで優しい眼差しだった。

「ほつとけよ！ あなたの肩が濡れるだろ」

英一は、自分がとつさに出しちゃった言葉が憎らしかった。

本当は、今、誰かに優しくされたかった。

本当は、今、誰かの心に自分の存在を映して欲しかった。

しかし、自分が出した言葉は、せっかく差し伸べてくれている手を……、今自分が一番望んでいた人からの手を、冷たく振り払うような口調であり、言葉だった。

あなたにもう一度逢いたかったんだ……

心の奥にある気持ちが、英一の口からは、まっすぐとは出てこなかつた。

「……強がらなくてもいいのよ。あなた、本当は、今とても淋しい気持ちだったんだしょ。……まるで、雑踏の中に捨てられた、捨て猫みたいな顔してるわよ」

彼女は、アスファルトに座り込む英一の前に、そつとじゅがみ込み、優しく微笑んだ。

「なにがあったか知らないけど、こんなに濡れちゃって……」

そして、バックからハンカチを取り出し、英一の顔を拭いてあげる。

「あなた、こないだ着てた制服は、南青山学院の生徒でしょ。何年生？」

「……三年」

「そりゃ、じゃあ、受験生だね。こんなところで身体壊しちゃったら、大変よ」

「んな事、知つたこっちゃねーよ。それより、何で南青山つてわかるんだよ……？」

「……ふふふ、私も、南青山だから。あなたと一緒につていつても大学の方だけね。南青山学院大学の二年生」

ずっと探していた憧れの女性を前に、照れているのか、少し拗ねたような口調で話し続ける英一だった。

「……あつ、名前？」

「私の……？」

「……ああ」

「瞳、アヤキヒトミ綾木瞳。あなたは？」

「赤木英一」……

「ふふ、英一くんって言つんだ……」

「なんだよ、人の名前呟いて笑うなよ」

ひとつ小さな傘の中で、互いの心に抱える淋しさを、まるで剝那に書き消し合うかのように、一人はそつと笑い合っていた。埃っぽい街を打ちつける雨音は、どこか悲しいブルースの音色のように聞こえる夜だった。

<2>

『こないだ来た時なんかは、数枚の一万円札をテーブルに広げられてね、これでいいだろって、いきなり抱きしめてくる男性もいたわ』

自分の部屋で、机に向う拓巳の頭には、出逢いカフュにいた幸子の言葉が、先程からずっと頭に残っていた。

英一が出逢いカフュを飛び出した後、拓巳も塾の時間になり、順平を置いて退出したのだが、塾で授業を受けている時も、塾が終わる、自分の部屋で勉強している今も、ずっと幸子の言葉が頭に響いているのだ。

どうしようもなく落ち着かなくなり、勉強に集中できなくなつた拓巳は、こつものように、机の引き出しの奥に隠してあるヌード写真集を見て、気晴らしをしようとして、机の引き出しを開けた。

「……ないー?」

拓巳は、引き出しに入れてあった参考書や問題集を、全て部屋に撒き散らし、必死に引き出しの中を探すが、三冊入れていたお気に入りの写真集が一冊もないのだ。

「拓巳さん……、あなたが探しているものは何ですかしら？」

ふと、自分を呼ぶ声に、拓巳は後ろを振り返ると、そこには、自分の母親が立っていた。

母親は、まるで拓巳に見せつけるかのように、拓巳が大切に隠していた、三冊のヌード写真集を手にしていた。

「拓巳さん……、お母さんは前にも言ったわよね。こんなもの持つてるから、あなたの偏差値は下がってゆくのよ」

ヌード写真集を見つめる母親の目は、人間のものとは思えないような、冷たい目をしていた。

「お母さん、それは……」

母親にヌード写真集を見つめられた拓巳が、動搖を露せず、思わず声を出した瞬間だった。

「けがらわしい……」

なんと、拓巳の母親は、狂気に満ち溢れんばかりの鋭い眼差しで、そのヌード写真集をびりびりと、拓巳の目の前で破き始めたのだ。

「けがらわしい……」

母親の狂気に満ちた眼差しで、何度も何度も繰り返されるその言葉と、写真集が破かれる時の、びりびりといつ騒音にも似た音が、まるで拓巳を狂わせてゆくかのように部屋中に響き渡る。

「ああああああ！」

拓巳は、部屋に座り込み、唇をかみ締め、両手で両耳をふさぎ込み、心の中で悲鳴をあげる。

ヤメロ！ オマエハヤクデテイケ！

拓巳は心の中で、何度も何度も呟いた。

……しかし

「『めんなさい』『めんなさい』」

出てくる言葉は、何故か母親への謝罪の言葉だった。

涙で溢れた目で、母親へ謝罪することしかできない拓巳だった。

「そうよ。それでいいのよ拓巳さん。あなたを惑わすものは、お母さんが全て取り払ってあげるから。あなたは、東大の受験の事だけ考えればいいの」

先程とはうつて変わり、急に優しい眼差しに変わった母親は、部屋に座り込み、泣きじゃくる拓巳を、思いつき抱きしめた。

「……お母さん、心配かけましたね。僕は、もう大丈夫ですから。必ず東大に合格するよう必死で勉強しますね」

母親の腕の中で、全く生氣を感じさせないような田で、やう告げた拓巳は、急に立ち上がり、自分の机に戻り、てきぱきと問題集を解き始めた。

拓巳のその姿に、ほっと安堵のため息を漏らした拓巳の母親は、満面の笑みを浮かべ、静かに拓巳の部屋から出て行った。

母親が部屋から出て行った事を確認した拓巳は、解いていた問題集を閉じ、部屋の窓にそっと手を向ける。

窓を打つ雨音は、空虚な拓巳の心の中に、いつまでも虚しく響いていた。

『家には帰りたくないから……』

『……東大』

『僕と一緒に……』

窓をぼおっと見つめていた拓巳の心に、先ほどの幸子との会話が、ふと、また思い出されてきた。

拓巳は、しばらく何かを考え込んだかと思つと、まるで何かに決意したかのように、拳を強く握り締め、窓を叩く雨を、鋭い眼差しで見つめ続けた。

<1>

「お帰り。遅かつたじゃねえか、順平」

順平が、ボクシングジムの扉を開くと、誰もいなくなつたジムで、父親がリングサイドの周りを、タオルで丁寧に拭きあげていた。

『山下ボクシングジム』

元世界チャンプの順平の父親は、引退後、近所の中高生たちを集め、小さなボクシングジムを営んでいた。

順平が小学一年生の頃、一度だけ世界チャンプまで登りつめた父親だったが、その後の防衛戦で、すぐにタイトルは奪われてしまい、あとは惨敗に次ぐ惨敗で、チャピオンの座から、一気に転がり落ちた父親だった。

『ラッシュキーボーイ』

まるで、一発屋のようだった、情けない順平の父親を、当時のマスコミは、そう笑い飛ばしていた。

それにより、小学時代の順平は、学校で格好のイジメの対象になっていた。そして、それをいつも助けていたのが、英一だった。

「……まだ、いたのかよ」

順平は、ポケットに両手を突っ込み、斜に構えて、父親に小さく呟いた。

「……ああ。練習生たちが、怪我をしなかった、手入れは重要だからな」

背中を丸めた父親は、まるでリングサイドに精一杯の愛情を注いでいるかのように、目を細め、ひと拭きひと拭き、丁寧に拭き上げていた。

「……こつまで続けんだよ。こんなとこ」

「さあな……」

「近所の子供ら相手に、ボクシング教えて、そんなに樂しいのかよ」

「……まあな」

弱冠三十八歳にしては少し老いいずきで、順平からは小さく見える父親に、順平は呆れたように言葉をかける。

しかし、父親は、そんな順平に対しても、ただ背中を向け、寡黙に答えるだけだった。

「なあ……、親父、ボクシングって、そんな楽しいのかよ」

順平は、ジムの片隅に飾られた、チャンピオンベルトを肩にかけた父親の眞面に、目を向けた。

「……お前は、キレイなのか」

順平の言葉に過敏に反応した父親は、振り返り、順平を見つめる。

「オレは、オレは……、普通に大学に進学して、普通に就職してえ
よ」

「…………」

「何度言つたら分かる。順平、お前には、一流のセンスがあるんだ。
なに、そんな夢のねえ事、言つてやがんだ」

「……夢ねえ。夢で食つていけたら、誰も苦労しねえぜ」

順平は、床に転がっていたグローブを取り、トンとグローブ
を叩いた。

普通が一番だ

幼い頃より、ストイックに、ボクシングの世界で生きてきた父親
を見て、順平は常々にそう思つていた。

一流企業で働く父親を持つ、英二がいつも羨ましく、そして、
そんな英二と友達である事が、順平にとっては小さな誇りだった。

「……来月、後楽園でプロテストがある。ロミッシュジョンに申し込んで
いたから、まずは早くプロになれ。オレみたく、歳をとつてから
じゃなく、お前は、若ければうちに、早くプロになるんだ。そして、
多くの経験を重ねろ。順平、お前だったら、絶対え世界チャンプになれる男だ」

父親は掃除をする手を一旦休め、斜に構える順平の肩に、手を添
えた。

「……つ、勝手な事してんじゃねえよ……」

順平は、父親の手を払つと、くるりと體を向け、ボクシングジムを飛びだした。

「順平 つ！ オレは……、オレは、絶対お前と一緒に、もう一度、世界チャンピオンを掴むからなあ！！」

ジムを後にして、降りしきる雨の中を駆けてゆく順平の耳に、悲痛にも似た父親の声が聞こえてきた。

△△△

「なんで……、なんで俺になんか構つてんだよ……」

小さく広げられた真っ赤な傘の下で、英一は自分の前にしゃがみ込む瞳に、小さく呟いた。

「お礼よ。」の間の

「……お礼！？」

「そう、あの時の朝。私が痴漢されたと思って捕まえた男の子いたじゃん。私と、あの時の駅員さんは、あの子の言つ事なんて、一切、信じたりなんかしなかったわ。」

「…………」

「だけど、いきなり現れたあなた達は、事情も聞かないまま、あの子が言つ事を信じた。ただ、盲目的にね。『トモダチ』だからって

ね

「……ああ」

「英一……くんの、あの時の田、すくまつすぐでキレイだつた。
なんか羨ましかつたなあ。……いつからか忘れちやつてた、あつた
かい気持ち……あの時、思い出した気がしたわ。だから、お礼よ。
私の心に、キレイな水を注いでくれたお礼」

英一に、そう話す瞳は、少し照れくさそうに笑つていた。

「なんだよそりや。いまのあなたが汚いみてえじゃん」

瞳の言葉に、思わずふつと笑つてしまつた英一は、はじめて瞳の
田を見て話かけた。

「……汚い？……ふふ、そうかもね。あなたから見たら、私は汚
い人間なかもしれない。だけどね、生きてゆくには、じょうがな
いのよ。あの頃のままじゃいられない……」

英一から田線をそらし、そう小さく瞳へやく瞳の田は、あの朝に英
一が感じた、寂しさで溢れていた。

「……なあ、あなたは、何でそんなに悲しい田をしてんだ？」

「……えー？」

「はじめて、あなたと逢つた朝、あなたは、とても寂しそうな眼差
しをしていた。そして今も……」

英一は、自分から目線をそらす瞳に、優しく語りかける。

「……私はもう、あの頃にはきっと戻れないから」

その時、英一には、遠くの人混みを見つめる瞳の田に、小さくこぼれそうな涙が見えた。

「……ごめんね。変な事言っちゃって。私は時間だから、もう行かなきゃ」

そつと英一に笑いかけた瞳は、手に持っていた真っ赤な傘を、英一の手に渡した。

一瞬、自分の手に瞳の暖かい手が触れ、英一は鼓動が早くなるのを感じた。

「……私、タクシー使つかり、傘、持つてきなよ」

呆然とする英一を横田に、瞳は立ち上がり、タクシー乗り場に急ごつとした。

「……あーー！ ちよつ……待てよ」

思わず立ち上がった英一は、気がつけば、大きな声で瞳に呼びかけていた。

雨の中、消えてゆこうとしていた瞳が、英一のその声で、ゆっくりと後ろを振り返った時、降りしきる雨の中、二人の目線は静かに重なり合った。

「もう少しだ……。もう少し、傍にいてくれ」

「……え！？」

英一は、立ち止まつた瞳の前まで一步一步ゆっくり歩き、ジーンズのポケットから、くしゃくしゃになつた一本のタバコを取り出しだした。

そして、タバコに火をつけた英一は、精一杯の笑顔を浮かべ、瞳に語りかけた。

「一本だ……。なあ、この一本のタバコが燃え尽きるまで、一緒にいてくれないか？」

雨が降りしきる人混みの中、真っ赤な傘の下で、英一と瞳は、まるで霧のようになつて漂うタバコの煙に紛れ、僕くも小さく光る灯火を、いつまでも静かに見つめ合つていた。

あの頃には

きっと戻れないから

彼女の言葉が

意味する事なんか
これっぽっちも
分からなかつたさ

ただあの時の俺は

ゆっくりと
ゆっくりと
燃えてゆく
この一本の

タバコの先に
小さく光る灯火が
いつまでも
消えちまわないように
彼女と一緒に
眺めていたかつただけなんだ

第9話 teen age blue (2) (後書き)

こんばんは
あいぽです。

ようやく少しずつ物語は動き始めました。
様々な悩みを抱える三人の少年たちの葛藤は、いよいよ来週から、
暴走に……！？

次週は新章
「Scrap Alley」
が始まります。

これからもプロシクお願いします。

あいぽ

「いやあ～、もつすげえのなんのつて、お前Fカップだぜ！ Fカップ！」

昨日までの大雨とはうつて変わり、春の暖かい日差しが校舎の窓から差し込んでいた。

まっすぐと続く廊下を教室に向かう順平は、横に並んで歩く拓巳に、先ほどから少し興奮気味に話かけていた。

しかし、拓巳はとくに、そんな順平に対し、ただ適当に相槌を打つだけで、常に目線は手元に開いた参考書にあった。

「それでさあ、オレの田の前でぶるんぶるん揺れる訳よ、Fカップが！！」

「……それで？」

「それでって、お前、彼女はさあ、オレの華麗な腰使いで言つんだ。『あつ、いやん、やめて……もつともつと』ってね」

順平は、両手で自分の体を抱きしめ、嬉しそうに女性の吐息を真似る。

「だ・か・ら……！ 君は、朝っぱらから、そんな事を僕に言つたために呼び止めたのかい？ いい加減にしてくれよ……！」

拓巳は手元の参考書をパタンと閉じ、おどける順平を直視して声を上げる。

いきなり怒り出す拓巳に、驚いた順平が呆然と絶句してしまった時だった。

「いよー！ 順平、今朝は悪いいな、先行つてもらつて。ちよつと昨日寝つけなくつて寝坊しちまつたよ」

廊下の真ん中で対峙し合つていた順平と拓巳の真ん中に、英一が駆けてきて一人の肩に手を回した。

「……アレー？ どうしたの一人でにらめつこなんかしちやつて」

英一は、笑いながら順平と拓巳の目を交互に見つめる。

「こ……この人気が朝からつまらない事で僕を呼び止めるからだ！ 君の相棒も来たことだし、僕は勉強で忙しいからこれで失敬するよ。そんな低俗な話は、相棒くんにでもしてくれ」

「な、なんだとこのヤローー！ お前、それでも昨日まで『僕は死ぬんだあ～』って泣いてたヤツのセリフか？ お前つ、オレたちが来なけりやあ死んでただろ」

「まあまあ、順平も拓巳も落ち着けよ。何なんだよ、朝っぱらから。……で、順平、お前朝から何の話を拓巳にしてたんだよ」

呆れたように一人を見つめた後、英一は順平に話しかけた。

「さ……昨日の人は妻と過ごしたオレの熱い夜の話だよ……」

英一に見つめられた順平は、田線を逸らし下を向き、少しじもりながら答える。

「あ～！？ 順平、お前、昨日の夜ヤッたのか？」

「……ああ

英一は、順平の目をしばらく見つめた後、噴出すように笑い出した。

「順平、お前何が熱い夜だよ！ ホントはヤッてねえだろう！ お前がウソつくり右の眉が上がるからすぐ分かんだよー。このウソつきが！」

英一は、順平の頭を思いつきり引っ叩いた。

すると、順平も「なんだと、このヤロー」とボクシングのフットワークをリズミカルに行い出す。いつものまにか、廊下では英一と順平のじやれ合いがいつものように始まりだした。

「も～！ うるさいんだよ君たちは！ さつさと僕の前から姿を消してくれ！ 君がセックスしようが、セックスしまいが、僕には関係ないんだ。いちいちそんな事で、僕の勉強の時間を邪魔しないでくれ！！」

そんな英一と順平に、いよいよキレた拓巳は、廊下中に響き渡るくらいの大きな声で叫んでしまう。

すると、廊下を歩いていた女子生徒たちは、拓巳の「セックス」という言葉に敏感に反応して、拓巳に思いつきり冷たい視線を投げ出した。

「あ……君たちはサイテーだ！！」

周りからの自分への視線を感じた拓巳は、みるみるつむじ顔を真っ赤に染め出し英一と順平にそう呟くと廊下を走りだした。

「おーいっー、ちょっと待てよ」

突然廊下を走り出した拓巳に驚いた英一は、必死に追いかけ、拓巳の肩をつかみ真剣な表情で訴える。

「お前は……ヤツたのか？　あ、ほら変な意味じゃなくて、病気だよ。ヤツたら病氣治るかもしんねえって話してたから……」

「そ……そ、うだよ、オレもその話が聞きたくて、お前を呼び止めたんだよ」

英一と拓巳に、後から追いついた順平も真剣な眼差しで拓巳を見つめる。

しかし、拓巳は下を向き、ただ首を横にフルだけだった。

「……そつか」

その姿を見て、英一と順平のため息がもれる。

「君たち……、本気で僕を心配してくれてるのか？」

まるで自分の事のようだし、自分の病氣を心配してくれている英一と順平の姿に、拓巳は嬉しくなったのか、さっきまでとはうつて変わり、少し落ち着いた表情で英一と順平を見つめる。

「……つたりめえだろー、言つたじやん、俺たちは『トモダチ』だ

つて

「ホントに、信じていいのか……？」

「ああ、オレたちは絶対え裏切らねえ」

「せうせ、ロイツのエロ話だけは信用できねえが、あとは何でも信じてくれよ」

英一は、順平の頭をもう一度思いつきり叩いた後、拓巳に無邪気な笑顔を向ける。

「いってえ、何すんだよ英一！」

「いっせえ！　このエロ男」

またまた、英一と順平のじゅれ合いが始まるが、今度はそんな二人を、拓巳は微笑ましく思えて笑顔が浮かんでしまう。

母親から執拗なまでの干渉を受けながら、勉強漬けの毎日を過ごしてきた拓巳は、今まで友達と呼べる者など周りにはいなかつたし、他人どとのように付き合つてゆけばいいかななど分からなかつた。しかし、英一と順平を見て微笑む拓巳の笑顔は、まるで初めて誰かを受け入れたような、そんな心からの笑顔だつた。

「なあ……、もし君たちの事を信じていいんなら、相談したいことがあるんだが、聞いてもらえるかい？」

「ああ、もちろんさ」

「じゃあ、今日の放課後に、中庭の芝生で待ち合せしよう」

「……オッケー」

「……了解」

突然の拓巳の申し出に、一瞬は戸惑った英一と順平だったが、思いつめたように自分たちに訴えかける拓巳に、真剣な表情で快く返事をした。

あの頃の俺たちは
ただいつも信じていたんだ
社会のルールなんて分かんねえ俺たちが
出来る事つていつたら
ダチを信じる事ぐれえしかできなかつたからさ
この三人の友情が
この先一体どこに辿り着くかなんて
あの頃の俺たちには
全く分かりはしなかつた
ただいつも
この「友情」だけは永遠だつて
信じていたんだ

< 1 >

「なあ英一? 勃起男の相談つて何だと黙りつ~」

「さあな、秀才の考へてる事なんか、俺には分かんねえよ」

「拓巳との約束通り、英一と順平は、放課後の校舎を中庭までと歩いていた。

拓巳の急な申し出をうけ、怪訝な顔をする順平に対し、英一は赤い傘を楽しそうに振り回しながら、ここへやかに歩いていた。

「英一さあ……、朝から思つてたんだけど、お前、なんでこんな天気のいい日に、嬉しそうに傘なんか持ち歩いてんだ?」

「おつ? これか?」

「おう、だつてどう考へても、おかしいだろ?。しかも真つ赤な傘なんて」

英一は、不思議そつに首をかしげる順平の横を急に駆け出して、順平に向かつて、その傘を大きく広げた。

「愛だよ、愛ー。ビバあつと真つ赤に燃える愛の光さつー。」

そして、順平に向かい「バイバイ」を突き出したかと黙りつと、「ほり、順平早く行べや」と跳ねるよつて廊下を駆け出した。

「……つおい！ 英一、待てよ！ なんだよ愛つて。お前まさか、こないだの女と再会したのか！」

「……さあね～！」

「なんだよ、この色ボケ男！ 白状しねえとぶつ飛ばすぞ」

校舎の窓から差し込む日差しは、嬉しいそうに無邪氣に駆けてゆく英一と、それを追いかける順平を、眩しいくらいに照らしていた。

＜2＞

「出逢いカフェの女を助けたい～！？」

英一と順平の驚く声が、中庭の芝生を包んだ。

真剣に一人の目を見つめる拓巳は、眉間に皺を寄せ、英一と順平に話を続けた。

「こままだと、彼女の幼い心は、腐敗した大人たちの心なき言動や行動により、いつしか立ち直る事もできないくらい、傷つけられてゆくだろう。大人たちは、口を揃えて言う。勉強すれば、立派な人間になれる、そして誇り高き人生を歩めるってね。だけど、本当にそう思うかい？ もし、大人たちの言う事が正しいのなら、なぜ彼女はあんな所に閉じ込められなきやならないんだ！ 娘を返りみない母親と、性にまみれた汚い大人たち！ 大人たちは偉くなんかない！ 社会で生きてゆく中で、自分が抱えてしまったストレスを、僕らにぶつけているだけなんだ！」

拓巳は、そう言い放った後も、肩ではあはあと息を切らし、興奮

さめやらぬ状態で一人を見つめる。

「……なあ、勃起男よ。全然言つてる意味は分からんが、ようは出逢いカフエにいたあの子に惚れたんで、あそこから連れだし、自分のものにしたいつて事だろ。カツコつけずに、素直にそつ言えばいいじゃん」

順平は、興奮する拓巳の肩に腕を回し、呆れたように笑っていた。

「違う！ 惚れたとかではなく、僕が言いたい事は、もつと高尚な事なんだ。彼女の夢を……東大合格を叶えてやりたい。僕らは、一緒に東大に行くんだ。そして、大人たちから受けた全てのストレスをバネにして、東大で勉強を続け、この街を……いや、この社会を変えれるような大人になるだ！ これから僕らのあとに生まれてくる子供たちのためにも、僕らは絶対に東大へ行き、勉強しなければいけない！ 僕は……僕はやっと分かったんだ。僕が僕であるための価値が。僕が、僕が……勉強するのは、親のためではない！ 僕らが生きてゆくこれから社会のためなんだ！」

「僕が僕である価値か……。なあ、順平、お前、自分の価値ってなんだと思つ？」

「なんだよ急に、英一。オレはそのお……なんだ……？ えっと、よく分かんねえや」

「俺もだよ、順平。なんのために生まれてきたのかも、何のために生きてんのかさえも分かんねえや。……ははは、でもさあ、俺、最近気づいたんだ。自分が何の価値を持つてんのかも分からねえ人間だけど、例えば誰かの事を好きになつた時、その人を愛しく思う気

持ちや、その人を大切にしたいって気持ちは、この世界中で俺だけのもんなんだ。俺だけの心に輝いてるもんなんだ。だからさあ、誰かを好きになつて、その人の事を想う時、もしかしたら、それが俺だけにしかない、俺だけの価値なんじやないかな、つてね」

英一は、昨夜の降りしきる雨の中、瞳と出逢い、瞳と話したひとつひとつ事を思い出しながら、優しい眼差しで順平に話していた。

「……なあ、拓巳が言つてるような難しい事は俺にも分からねえよ。だけど、コイツが見つけた価値つてのが、その子と一緒に東大に行く事なら、俺たちも手伝つてやううぜ」

英一は、芝生に寝つ転がり、流れる雲を見つめて、静かに呟いた。

「……英一くん」

そんな英一に向かい、嬉しそうに拓巳は声を上げる。

「誰かを好きになつたらね……」

そんな一人に対し、順平は「う」と、自嘲気味に一人複雑な笑みを浮かべ、英一に背を向け芝生に横になつた。

英一も拓巳も、恋をして好き勝手に盛り上がりやがつて。

順平は里美の事を思いながら、目を閉じる。

昔から順平が好きだったのは、クラスメイトの里美。しかし彼女がずっと想いを寄せてるのは親友の英一だった。そんな事くらい順平も分かっていた。

自分の恋が叶う訳なんかないって事も。

里美の恋を応援してやりたいが、英一の恋も応援してやりたい。

だけど……

俺だつて里美が大好きだ。ちくしょー！

順平は、しばらく何か考えた後、目の前に広がる芝生をかきむしり、ぱあっと空に向かって投げつけた。

「わあ～つたよ！ 英一、拓巳い。一人まとめて面倒見てやるよ！ そのカフェの女の子の連れ出し手伝つてやるから、ぐだぐだ難しい事なんか言わねえで、ちゃんと自分の気持ちぶつけてやれ！ それから、英一！ お前も拓巳に負けねえように、頑張んだぞ！～！」

「順平くん！ ありがと～。……ありがと～」

「バーカ、言わねえでも、俺は彼女を幸せにするぜ」

順平のその言葉に、嬉しそうに順平に乗りかり声を上げる拓巳と、空を見つめる続ける英一がいた。

＜3＞

三人は、いったん自宅で私服に着替え、ハチ公前に夜の九時の集合する事を約束して、中庭を解散した。

『じゃあ、俺はちょっと彼ら彼女に傘返してくるぜ』

英一のその言葉で、一人で帰宅する事になった順平は、青山通りを渋谷駅へ向かい一人うつ向歩いていた。

辺りは、眩しいくらいのオレンジ色をした夕日に照らされて、順平の影は長く長く映し出されていた。

「あれ、順平！ めづらしげ、英一と一緒にじゃないんだ」

ふと自分を呼ぶ声がしたので、顔を上げると、少し先を歩いていた里美が順平に気づいたのか、手を振り微笑んでいた。

「……ああ、里美ちゃん」

順平は力のない声で一回返事をすると、また一人でうつ向歩き続けた。

「うう！ 順平、人が声かけてやつてんのに、ナニ無視して先に行いつとしてんのよ！」

里美は、いつものようにふざけて、順平の背中に飛び付く。

「ねえ、英一は…？」

「知らねえよ」

順平は、ため息をつき、里美の手を振り払い、また歩き出す。

「なによ、どうした順平？ 暗い顔して。英一とケンカでもしたの？」

「…………」

「ハハー、だまつてちや分かんなこぞ、順平」

里美は、順平の前に周り込み、無邪気な笑顔で順平を見つめた。

「ね、ナニがあつたんなら、里美ちゃんに話してみな？　山下順平くん」

「…………ほっとけよ」

「何よ。今日の順平つまんない」

「…………俺だつて、…………俺だつて色々あんだけよーーー！」

里美の笑顔についに耐えられなくなつた順平は、自分を心配する里美をよそに、思わず青山通りを走り出した。

次第に視界から遠くなる順平を見つめ、里美は大きな声で叫んだ。

「プロテスト……。受けるんだつてねー、おじさんから聞いたよー！
ファイトだよ順平！」

その言葉に、一瞬順平は立ち止まり、里美を振り返った。

オレンジ色のタロが眩しく、遠くの里美の姿は人影のよくなつていている。

そして、そんな里美を見つめていると、順平の目に涙が溢れてくる。

「なあ、里美ちゃん！ プロテスト……プロテスト合格したら……！」

「……何？ 聞こえない！？」

「プロテスト合格したら、オレと付き合つてくれ！ オレ、ずっと前から、里美ちゃんが好きなんだ……！」

順平は、里美に叫ぶと、遠くに佇む里美を残し、オレンジ色のタ斗に向かつて思いつきり駆け出した。

第1-2話 Scrap Alley(3)

<1>

「英一……くん!?

眩しいくらいのオレンジ色の夕日が、辺り一面に植えられた美しい木々の縁から差し込む南青山学院大学のキャンパスで、一日の講義が終わつた瞳が、制服姿の英一の姿を見つけて驚いていた。

キャンパスを行き交う学生達の向こうに、真っ赤な傘を肩に掛け、はにかんだように微笑む英一が見えるのだ。

瞳は思わず英一に駆け寄り声をかける。

「……どうしたの?」

「ははは、……これ、返さなきやなと思つて」

「わざわざ……? ふふつ、別に良かつたのに」

どこか照れくさそうにする英一を見ていると、何だか少し照れてしまつ瞳だった。

傘を瞳に渡した英一は、手持ち無沙汰になつた両手を、ポケットに突つ込み、ぶつきりぽつに瞳に尋ねる。

「あ、……な、なあ大学つて楽しいか?」

「……え?」

「……あ、ほら、俺、実はまだ進路決めてなかつたからさあ。大学行くつてどんな感じなんかなあーなんか思つちやつたりなんかしてさあ」

「ふふつ、英一くん、まだ進路決めてなかつたんだ。なんかやりたい事とかつてないの?」

瞳は近くにあつたベンチに腰を降ろして英一を見上げた。

「イヤ、やつたいた事つて言われてもさあ、ねえんだよなコレが。ちくしょうー、つたく、順平や拓海が羨ましくなるぜー。」

英一は自嘲気味に少し笑うと、足元の小石を蹴り転がし、オレンジ色の夕日を見上げた。

プロボクサーを目指す順平や、東大を目指す拓海と違い、英一ははつきりとした自分の将来が想像できず、卒業後の進路を決めてゆく周りを横目に、いつも苛立ちと不安を抱えていた。

「……なあ、あんたはなんで大学に進学したんだ?」

英一はベンチに腰かける瞳の正面にしゃがみ込み、瞳に尋ねた。

「……え!? 私……」

「……ああ。なんかやりたい事があつたから?」

「……」

しかし英一のその質問に、瞳は英一の目を反らし困惑したような複雑な表情を浮かべるだけだった。

「んー? どうした?」

「…………」

「あ、イヤ……。聞いたかないなら聞こけどさあ。みんななんで大
学つて行くのかなあって思つてさ」

「…………ごめん。私、もうバイト行かなきゃ」

「あ、おー、ちよつ…………!」

英一の質問にしばらく黙り込んでしまっていた瞳は、急に何かを
思い出したかのように立ち上がり、戸惑つ英一を残し足早に歩きはじ
めた。

「あ、オイ待てよ! ……」「ごめん。俺なんかマズイ事言つた?」

「…………」

「なあ、ちよつ、待つてくれよ

必死に瞳を追いかける英一だが、まるで何かに取りつかれたよう
に、瞳はカツカツとヒールを鳴らし、無言のまま足早に歩いてゆく。

「ちよつ……、おー、瞳イ…………」

何がなんだか分からなくなつた英一は、キャンパスを行き交う人
混みに埋もれてゆく瞳の背中に思わず声を上げる。

英一のそのまますぐに自分を呼ぶ声に、瞳は思わず一瞬足を止めてしまひ。

そして……

ゆつくりとゆつくりと英一を振り返った。

無言のまままだ英一を見つめる瞳。

その悲しげな表情に英一は瞳を見つめたまま、何も言えず動けなくなってしまう。

気がつけば、瞳の頬にゆつくりと涙が落ちてゆくのが英一には見えた。

「……好きな人がいたから。この大学に大好きな人がいたから……」

「……え！？」

唇を噛み締め、震える声で必死に自分に何かを訴えかけようとす る瞳を見ていると英一も胸が苦しくなる。

「……高校の頃ずっと憧れていた先輩だった。同じ大学に進学すれば、先輩とずっと一緒にいれると思っていた」

「……」

「……だけど、だけど、もう先輩はいない……」

「……」

「亡くなつたの……。病氣で……。大好きだつたのに……。」
進学できてやつと思いが通じて、ずっと一緒にいよつて約束してくれたのに……！」

「……瞳」

次第に感情が高ぶりはじめ、その眼差しがどんどん涙で溢れ返る瞳に、英一は駆け寄り両手を広げて必死に訴えかける。

「「ごめん。……なあ、俺が悪かった。変な事聞いてホントごめん！
だから、なあだから……」

「……愛してたのよ！ そう、私は彼を愛していた。……だけど、
だけど私は彼に何もしてあげれなかつた。病氣で苦しむ彼の手を、
たゞつと握つていてあげる事しかできなかつた。……そのうち彼
の手からは温もりが消えてゆき……」

「……瞳」

「ねえ、あなたに分かる！？ 大好きな人に、……愛している人に、
何もしてあげれない苦しみが ！！」

彼女が背負つていた重さなんて……
あの頃の俺には

まだ分からなかつた
彼女がどんなに辛い思いをしてきたか……
どんなに苦しい思いをしてきたか……
それを理解するには

あの頃の俺は

まだ若く子供過ぎたんだ

……だけど
……だけど
ただ俺は

その瞳の奥に抱える彼女悲しみを
いつか拭つてやりたかつたんだ

＜2＞

「遅つせ～なあ、英二！ アイツ何やつてんだよ。つたくよ～！」

陽が沈み、華やかにネオンが煌めく渋谷駅のハチ公前では、目の前のビルに掛けられた大きなスクリーンに目をやりながら、順平と拓巳が英二が来るのを待つっていた。

渋谷のスクランブルにある大きなスクリーンからは、先ほどから様々なアーティストのミュージッククリップが映し出され、渋谷の街を華やかに彩つっていた。

「……おっ、拓巳い、ほらアレ見てみろよ！」

順平に声をかけられた拓巳がスクリーンに目をやると、アーティストたちのミュージッククリップの合間に、丸日食品のハンバーグの「マーチャルが流れ出していた。

『美味しい！ 安全！ 明日も食べたい！』

丸日ハンバーグの軽快なBGMにリズムを取りながら、順平は拓巳に自慢げに話す。

「アレ、英二んとこの父ちゃんの会社なんだぜ。あ～みえてもさつ、

「アイツん家は結構エリートなんだよなあ」「

「へへっ、英一くんの父さんって丸田に勤めてんだ」

「ああ、偉いさんいらっしゃる」

「……ウソー?」

「ホント。つたく羨ましいつたらありやしないよな。オレンヒコの親父なんて、いまだに夢にしがみついてる貧乏ボクサーだぜ。……なあ、お前んとこの大ちゃんは?」

「……えつー? 僕の父は……」

僕が小学校の頃に失踪した……

その言葉に、先ほどまでもおどけていた順平の表情が曇る。

「……つisman。変な事聞いて……悪かったな」

「……いいよ。あんな人の話。別に父親ともなんとも思っていないし。ただ……」

「んー? ただ、どうしたんだ?」

「……なんかそれからだつたかなあ。母親が急に僕に執着はじめたのは」

拓巳は、拳を握りしめ、まるで怒りに満ち溢れんばかりの鋭い眼差しで何かを睨みつけるような表情を浮かべていた。

銀座方面へ走るタクシーの中では、瞳が外に流れゆく街の明かりをぼおつと眺めていた。

頭の中には、先ほどの英一とのやりとりが走馬灯のように流れる。

まっすぐと自分を呼ぶ英一の声。

まっすぐと自分を見つめる英一の眼差し。

どこか汚れのない英一の姿に、思わず高ぶった感情をぶつけてしまった自分。

昨年の秋に愛する人を亡くしてから、感情というものを心の奥に鍵をかけてしまい込み、ただバイトに明け暮れ生きてきた自分が、あんな風に感情を剥き出しにしてしまうなんかは、自分自身が想像もつかない事だった。

そして……

今まで心に溜めていた感情を、英一に全て吐き出した事により、何故か心が少し楽になつた氣もしていた。

今でも心の底から亡くした彼を愛しているし、一生忘れられないと人だと思っている。

……ただ

英一とはじめて出逢つた渋谷駅のホーム。

何かに導かれるかのように再会した雨の日のハチ公前。
そして先ほどの夕暮れのキャンバス

何故か英二と逢つ度に、自分の心に懐かしい感情が湧き上がつて
くる感覚があった。

「英二くんがあ……。なんか不思議な子だな」

英二から返された真つ赤な傘を見つめ、瞳は小さく呟いた。

『……なあ。俺じゃダメか？ ほら、沈んだ時とかさあ、ダチに電
話したりとかしたら、何かすつとする時あるじゃん』

先ほど感情が抑えきれず涙が止まらなくなつた自分に、困惑しな
がらも英二が渡してくれた紙キレを、瞳はバツクから取り出す。

『……何もできないけどさあ、話聞いてやるくらいでできるから』

涙で溢れかえる自分の手を広げ、まるで自分を優しく包み込みか
のように、英二が両手で自分の手を握りしめ渡してくれた紙キレだ
った。

瞳は携帯電話を手にして、その紙キレに書かれた英二の番号をブ
ツシューした。

「もしもし」

タクシーの静な社内に、瞳が呟いく小さな声が響いた。

<1>

「……つたぐ、英一のヤツビ」ほつつき歩いてんだ?」

約束の時間を過ぎても、ハチ公前に現れない英一に対し、順平はジーンズのポケットから携帯を取り出し英一に電話をかけようとする。

「まさか、逃げ出したりなんかはしてないよね……」

そして、その横では少し不安げな表情を浮かべる拓巳がいた。

「バカヤロ、アイツにかぎって、んな事する訳ねーだろ! アイツはオレのマブダチだ!」

「……マブダチ」

心の底から英一を信じ、信頼しているような順平の力の籠つた声色に、拓巳はあつけにとられる。

受験という名の競争社会の中で、まわりの人間は全てライバルであり、誰かと心を分かち合う事など愚かな事だと信じてきた拓巳にとっては、順平と英一の一人にある強い心の絆が信じ難いものもあり、また少し羨ましくも感じた。

そして、拓巳の心の中、英一と順平の言葉が、自然と思いつ出てゆく。

俺たちの『トモダチ』だからよつーーー！

初めて、英一と順平に出逢った渋谷駅のホーム。今まで、まったく交流もなかつた自分を、同じ学校の生徒だという事だけで、信じてくれて助けてくれた二人の言葉。

あー！？ 見下してんじゃねえよ！ 俺たち同じ十七歳の高校生じゃねえか！

自分の存在価値すら分からなくなり、死を決意しようとしていた校舎の屋上で、自分に対しても必死に言葉を投げ掛けてくれた二人。

言つたじやん、俺たちは『トモダチ』だつて……

誰にも言えず独り惱んでいた自分の身体の事を、心底心配してくれた二人。

……『トモダチ』
……『トモダチ』
……『トモダチ』

気がつけば、拓巳は、今まで感じた事のないような暖かな光に、心が包まれてゆくような感覚を覚えてくる。

「ねえ、順平くん……。僕も、僕もその……君たちと『マブダチ』になれるかな？」

拓巳は、自分より背の高い順平を、照れくさそうに見上げた。

「……つたりめーだる」 順平は、ボクシングで鍛えられた太い腕を拓巳の首に巻きつけ、静かに笑った。

＜2＞

約束の時間を三十分以上は過ぎた頃だった。

息をきらしながら、英一が一人のもとに駆けてきた。

「……つすまねえ！ 遅くなつちまつて、悪りい。ちょっとくら、俺に今夜の事で作戦があつてね……」

「や……作戦……？」

突然の英一の言葉に、英一が遅れてきた事なんかはおかまいなしになり、順平と拓巳はまだ肩ではあはあと息をきらす英一の目を鋭く見つめた。

「ああ、作戦だ。だつてよう、カフュの女の子を連れ出すつてもよう、お前らどうせ強引にカフュに乗り込み、強行突破する事か考えてねえだろ？」

「はははっ、違えねえよ。こざとなつたら、オレの拳で邪魔するやつはぶつとばしてやるつもりだよ」

「……バカ、順平！ プロテスト前のお前に、ん危険な事させれるかよ。第一、例え俺たちが、その拓巳が言う女の子を強引に連れだした所で、その子の意思じやねえ後でややこしい事になるに決まつてんじやね～か」

「何言つてんだよ、英一くん！ 彼女はあそこから出たいに決まつ

てるよ……」

「……バーカ、拓巳。カウパー出してんじゃねえよ。それはお前の勝手な思い込みだろ。あくまでも、理想は彼女の意思で、あのカフHを出て、俺たちについて来てくれる事だろ」

英一は無邪気に笑いながら、拓巳の鼻を弾いた。

「じゃあ何だよ、英一。俺たちがまた金出してあのカフHに入つて、あの子を説得して連れ出すつて事か！？」

順平は、英一につづかかる。

「無理に決まつてんだろ。拓巳の話を聞いた限りじゃあ、眞面目そうな女の子で、見知らぬ男の言つ事にほいほいついて行くような女子じやねえだろ」

「…………」

「じゃあ、どうすりや言つてんだよ、英一？」

黙り込む拓巳と、これから何か楽しそうな事が起こりそうでたまらなく興奮気味の順平の目を、ゆっくりと見つめた後、英一は一呼吸おいてから、口を開いた。

「彼女に、その女の子を説得してもらう」

英一は、静かに後ろを振り返り、先ほどから英一の後ろに立っていた、華奢な女性の右手を引き寄せ、順平と拓巳の前で紹介をした。

「綾木瞳さんだ……。彼女に、カフュに入つてもう一、あの女の子を説得して連れ出してきてもらつ」

「あ……あなたは……」

いきなりの瞳の登場に、順平と拓巳は目を丸くして驚きを露せなかつた。

瞳は、照れくさそうに自分から目線を反らす拓巳にそつと近づき、優しい笑顔を投げかけた。

「こないだはごめんなさいね。迷惑かけちゃって……。だからね、私にも、あなたの恋を応援させて」

「…………」

拓巳は顔を真っ赤にして小さく頷いた。

そして、その後ろでは、順平に向かい小さくサインを投げかけ
る英一と、それに応えるかのように微笑む順平がいた。

<1>

拓巳が一目ぼれをした幸子という名の少女を、出会いカフェから連れ出すために、英一の提案とおり、瞳にカフェに潜入してもらい、その少女を説得してもらうという事にした三人と瞳は、いよいよ出会いカフェのある道玄坂の雑居ビルの前に着いた。

「……着いたな」

「ああ……」

英一と、順平は目を合わせ、大きく深呼吸をした。

ふと英一が、ビル入り口の横に視線を向けた時、その雑居ビルと隣のビルとの間に、出会い系の看板が倒れているのが見えた。その看板の中央には、先日英一がそれを思いつきり殴った時にできたのであらう、少し大きな窪みができていた。

その窪みを見つけた英一は、おもむろにその看板の前にしゃがみこみ、その窪みをそつと右手で撫で始めた。

そして、英一はしばらく何かを考えていたかと思うと、思いつめたような険しい表情で立ち上がり、真っ暗に広がる渋谷の夜空を大きく見上げて呟いた。

「……なあ、順平、拓巳。この街にもさあ、金で買えねえものつてきつとあるよなあ?」

「何だよ、どうしたんだ英一？」

「英一、く……ん？」

眉をしかめ、今にも泣き出しそうな表情で、星の見えない渋谷の夜空を見上げる英一の姿は、行き場所のない怒りと憂いにも似た悲しみに満ちていた。

そんな英一の様子に気づいた順平と拓巳は、まるで英一に優しく寄り添うかのよう、ゆっくりと歩み寄り、英一の横で一緒に夜空を見上げて口を開いた。

「英一……、オレたちが信じていれば、きっとそれは見つける事ができるや。オレはな……思うんだ。頭悪いから、世の中の事なんてちつともよく分かんねえけどさあ、世界中の大金持ちが集まつたつて買えねえくらい、金よりももっと価値があるものはきっとあるはずだつて。そしてオレも、それを絶対見つけたいと思つ、オマエらと一緒にな」

「うん、そうだね順平くん。僕たちなら、きっとそれを見つけられる気がするよ。この街の夜空ってさあ、あまりにも汚れすぎていて、星なんて全然見る事はできないでしょ。でもね、よく考えたら、この夜空の遙か彼方の宇宙では、幾千もの星たちが美しく輝やき続けているんだよ。……だから、だからね、僕たちさえ汚れていかなければ、他の誰もが見えないものでも、きっと見る事ができるし、手に入れる事もできるんだ。このカフェに来るような、お金にまみれて汚れきった大人たちが、いくらお金を積んでも見る事すらできないものをね。そう、それは遠い宇宙で輝いている星たちのよつ、元のみのよつ、限りなく美しいものなんだ」

「……順平、拓巳、ありがとな。そうだな、一緒に見つけよつな。
……金なんかいくら出しても手に入れる事が出来ねえようなさあ、
俺たちだけの宝物を」

どこかセンチメンタルに、真っ暗な夜空を眺める三人の横を、春の暖かな夜風がそつと通りぬけていった。

「じゃあ、私、行つてくるね」

いつまでも感慨深げに夜空を眺めていた三人に、少々呆れながらも、瞳は優しく微笑み話しかけた。

瞳からすれば、英一ら三人は呆れるくらいに幼く感じるのだが、渋谷駅の朝のホームで初めて出会つた時から、三人と一緒にいると、瞳は何故かいつも優しい気分にさせられていたのであつた。

そして、英一と一緒にいるときに、瞳は特にそれを感じていた。

「……ああ、瞳、拓巳のためにホントに頼むな」

英一、順平、拓巳の必死な眼差しを受けた瞳は、三人の顔をしつかりと見つめて小さく頷いた後、雑居ビルの中に入つていった。

「誰かのためにかあ……」

雑居ビルの廊下を一人歩きながら、瞳は静かに呟き微笑んだ。

<2>

「……で、英一、オマエいつから彼女とこんな仲良しになつちゃつたのよ」

瞳がビルに入つて行つた後、祈るようにカフエがある部屋の明かりを見上げている拓巳を横に、順平は先ほどからずっと氣になつていた事を英一に問いかけた。

「いつからも何も、放課後にさあ、大学まで傘を返しに行つた時に、彼女にケータイ教えたんだよ。そしたらさあ、お前らと集合するためハチ公前に急いでた時に、なんと彼女から電話もらつちゃたんだよなあ、コレが！」

英一は、タバコに火を点けた後、フウーッと大きく煙を吐き出すと、満面の笑みを順平に見せた。

そして、順平たちと合流する前に、突然かかってきた瞳からの電話を幸せそうに思い出し始めた。

△△△

『……もしもし』

ハチ公前に急ぐ英一の携帯に、瞳から着信があつたのは、ちょうど一時間ほど前だった。

「ひ……ひとみ？」

電話の向こう側の瞳の声が、あまりにも暗く沈んでいたので、英一は一語一語噛み締めるように瞳に呼びかけた。

「わははハーメン……。変な事聞いてほんとに悪かった」

『…………』

瞳の沈黙の隙間から、カーラジオが静かに流れる音が、英一の耳に聞こえてきた。

「……瞳？ 今、移動中なのか？」

『……タクシーの中。バイト先に向かってるの』

「……セフ」

トーンの低い瞳の声に、英一もいつしか声色が低くなっていた。

『……突然、電話、『めんね。なんかね、今日のこと思い出してたら、あなたの声が聞きたくなっちゃって』

「……そフ」

先ほどよりも少し明るくなつた瞳の口調に、英一も優しく答える。

『あなたって不思議よね、あなたの前だと何故か懐かしい自分に戻れる気がする』

「懐かしい自分？」

『……うん、怒つたり、泣いたり、興奮したり。……そんな感情、彼が亡くなつてから、もう自分にはないと思っていたわ』

「……」

『なんだらうなあ……、英一くんつて……』

「ほほつ、なんだうつつて、別に普通の十七歳のガキだよ」

『ふふふ、何よそれ。自分で自分の事、ガキとか言っちゃって、バカみたい』

声のトーンが少しづづ明るくなつてゆき、自分の話にも笑つてくれている瞳の様子に、英一はほつと一安心し、少し樂しくなつてきただ。

「あつ……、そだそだ、なあ、瞳」

『なに?』

「傘返しに行つた時、相談しようと思つてたんだけどさあ、ちよつとお願い事を聞いてもらつたりなんかしてもらえないかなあ、なんて思つてさ」

『……なによ、急に』

「えへつと、その……、瞳つて今夜空いてるか? つてか、イヤ、ウソ!」めん。今、バイトに向かつてゐるから、無理だよなあ……

『なによ、独りでブツブツ言つてないで、ひやんと言こなせ!』

「実はわあ
……」

〈4〉

「へへ、なんだよ英一? それで、お前、勃起男の恋の相談したら、

すんなりと今夜引き受けてくれたつてワケなのか？」

一通り話し終えた英一に向かつて、順平は首をかしげて問い合わせた。

「……ああ、何だか、どつちみち今夜はバイトに行きたくなかったから、ちょうど良かつたつんだってさ」

「へへ……、なんか良く分かんねえけど、オマエはオマエで憧れの人と急接近できだし、これで勃起男が恋する女の子を連れ出す」とも成功したら、オールオッケーだよな」

「……ああ、そうだな」

いつしか、英一と順平の二人も、拓巳と一緒に、雑居ビルのカブエがある部屋の明かりを真剣な眼差しで見上げていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8051d/>

十七歳の地図

2010年10月14日20時50分発行